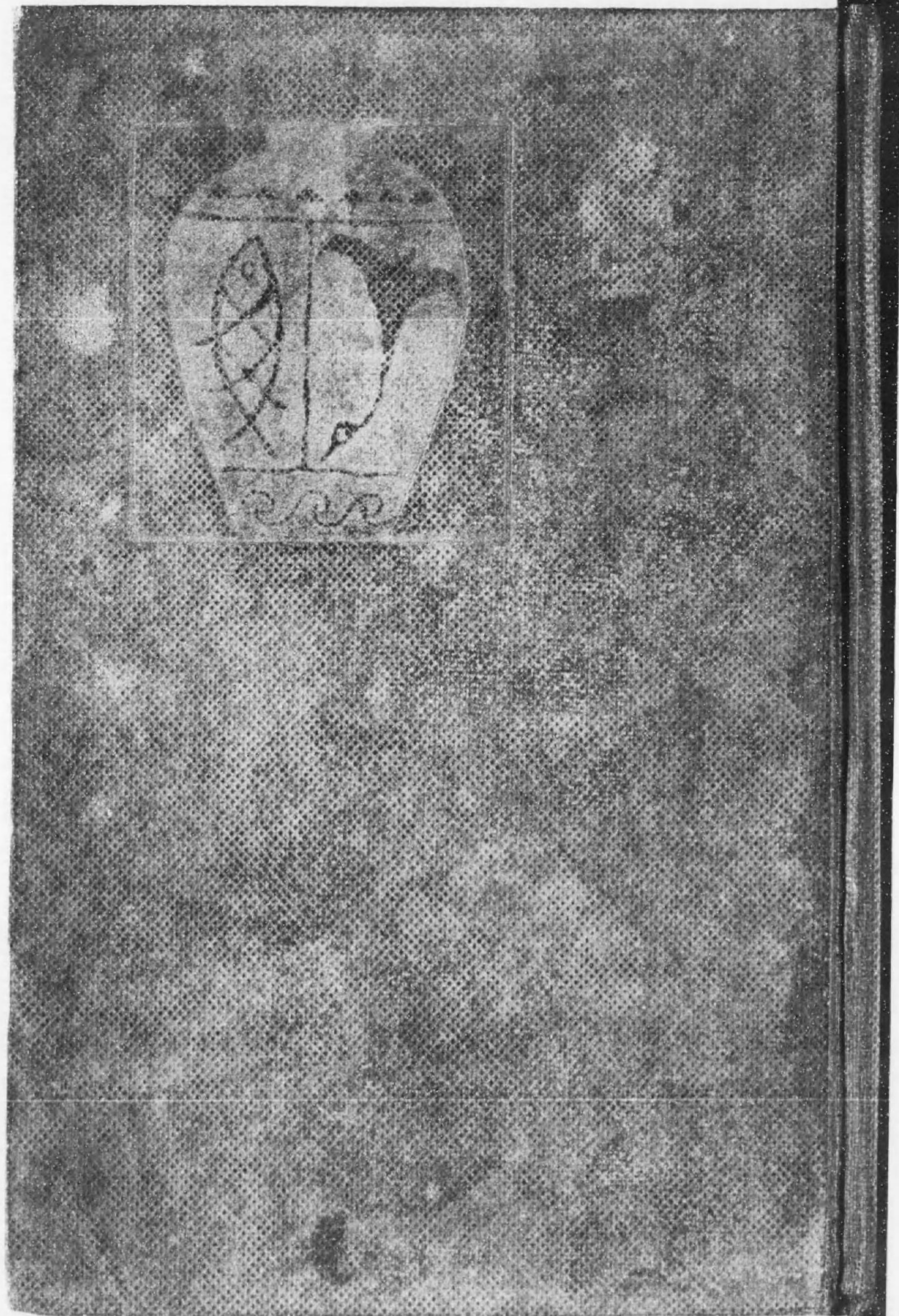


始







持109
986

泉



著人至田山



序

庭に蒔かれた朝顔の種は、一度芽を出してから、日々に伸びて、紅白とりどりの花を開く。人も、その通りに伸びるべきであらうが、伸びずに終る者が多い。或る程度迄伸びても、途中で枯れて、花を開くに至らない者が十中の八九、否、百中の九十九、千中の九百九十九に在る。世に、聖人とか、君子とか、英雄とか、偉人とかいはれる人の絶無に近い所を見ると、大多数の人が、空々寂々の間に一生を終つてゐるのである。

伸びずに終る朝顔は滅多にないが、伸びずに終る人は

矢鱈にある。畢意、修養の努力を缺くからである。向上の工夫を怠るからである。日々、金儲けの事位に没頭して、聖賢の書物があつても、讀むことをせず、偉人の言行を聞いても、鑑みることをしない。否、金を儲けて金持ちになり、榮耀榮華に暮すことが出来れば、これに上越す幸福はない、とばかり思つてゐる。斯くて、三十、四十、五十、六十と、年は次第に老つて行くが、孔子の取謂る、

君子は上達し、小人は下達す。

で、人間は、次第劣りに劣つて行き、聖人、君子の花を開くなどは思ひも寄らず、田甫の蛙と大差のない一動

物を以て一代を終ること、まことに可惜の至りである。

これを可惜と思ふ者は、宜しく精神を修養すべきである。修養の法如何？小を積んで大に至るのは、萬事萬端、皆然りである。一旦にして花を開く朝顔はない。一旦にして聖賢になる人はない。

急がずに、休まずに。(西諺)

今日も一徳、明日も一徳と、徳を重ね、工夫を凝し、次第に修養の功を積む——この外に方法はない。大學にも、

苟とに日に新たにして、日々に新たにせば、日に新たにして、又た日に新たならん。

と見えてゐるのである。

即ち、精神の修養は、日々にすべきものである、との見地から、私は、今、この書を著した。讀者、若し、日々に一章を誦して、日々に工夫し、日々に修省せられたならば、徳を進むるに於て、實效の極めて著しいものがあるであらう。伸びずに終る朝顔は少いが、伸びずに終る人は多い。切に一讀を待望すると云再。

至 人生 識 ず

一日 修養の泉目次

一月

一	日	結解某の高義……………	一
二	日	坂本龍馬の南洲評……………	九
三	日	耳の乾物……………	一四
四	日	西郷南洲の至誠訓……………	一八
五	日	長兵衛と十郎左衛門……………	二五
六	日	坂田藤十郎の濶達不拘……………	三四
七	日	舌の乾物……………	三八
八	日	井上毅の家憲九則……………	四〇
九	日	北條泰時の無慾……………	四三
一〇	日	乞食八兵衛の事……………	四六
一一	日	蜜蜂の針……………	五二

一二日	白河樂翁の風流箴	五五
一三日	木下藤吉郎の望み	六一
一四日	石谷貞清の苦言	六四
一五日	愛の神の失策	六六
一六日	吉田兼行名物の誠め	六八
一七日	毛谷主水軍情に通ず	七二
一八日	菰被りの名言	七五
一九日	摺んだら放さない	七六
二〇日	熊澤蕃山君子の心	八二
二一日	趙普論語を読む	八五
二二日	谷文晁張子の虎	八七
二三日	王女の成人	八九
二四日	熊澤蕃山小人の情	九二
二五日	立花宗茂の刀	九四
二六日	佐久間盛政の最期	九六
二七日	欺された隠居	九九

二八日	藤田東湖の忠孝一致論	一〇二
二九日	小早川隆景の歌	一〇四
三〇日	西園寺公衡慾を塞ぐ	一〇六
三一日	自分を見失ふ	一〇八

二月

一日	豊臣秀吉の遺訓	一一一
二日	武田信玄欺かす	一一三
三日	眞綿商赤恥ぢ掻き	一一九
四日	兼好法師火急の事	一二一
五日	太田道灌の少年時代	一二三
六日	支配勘定某の述懐	一二五
七日	子蟹の逆襲	一二七
八日	身死して財残る	一二九
九日	加藤清正の人物鑑定法	一三一
一〇日	塚原卜傳門人を評す	一三二

一一日	抜けた駕籠の底	一三五
一二日	恒産と恒心と	一三九
一三日	正しき服装	一四二
一四日	井伊直孝の教訓	一四四
一五日	二十里の道	一四六
一六日	他に勝ること	一四八
一七日	成瀬善く散す	一五〇
一八日	藤原惺高の秀吉評	一五二
一九日	寝呆けた八兵衛	一五五
二〇日	行脚のおきて	一五七
二一日	家康水を引かす	一五九
二二日	惺高と山城	一六一
二三日	落した血	一六三
二四日	人を救ふこと	一六六
二五日	秀康お國の舞を見る	一六八
二六日	如水三成の前途を卜す	一七一

二七日	九百里の馬	一七三
二八日	抑の一字	一七五

三月

一日	日根野返金を斥く	一七七
二日	加藤清正の華押	一七九
三日	一時の苦み	一八一
四日	あなた任せ	一八二
五日	太閤の傲語	一八七
六日	秀吉怒を藏さず	一八八
七日	麝香猫の三變化	一九一
八日	人に諭すの語	一九三
九日	上杉謙信の詩	一九五
一〇日	小牧の役の平八郎	一九六
一一日	佻儂の療治	一九九
一二日	書生を戒しむ	二〇一

一三	僧正禪名を厭ふ	二〇五
一四	南洲粗食に安んず	二〇八
一五	長過ぎる手綱	二一三
一六	許由孫晨の事	二一六
一七	名人太郎堀秀政	二一八
一八	刑部太閤の恩に感ず	二二一
一九	蜘蛛あしらひ	二二三
二〇	山岡鐵舟の家訓二十則	二二六
二一	唐犬權兵衛召し捕へらる	二三〇
二二	田子方の傲語	二三三
二三	舞の試験	二三六
二四	繪事も心から	二三八
二五	太田道灌敵將に死を吊す	二四一
二六	俳人涼菟胡蝶となる	二四三
二七	括り猿	二四四
二八	知足と不知足	二四六

二九	まつ女の孝行	二四七
三〇	佐久間安次の謁見振り	二五一
三一	渴して水をのみます	二五三

四月

一	大福長者の致富訓	二五五
二	智恵伊豆一生の不覺	二五九
三	中山勘解由の大決心	二六三
四	五重の樓	二六六
五	中根東里の壁書	二六八
六	矢田作十郎の金鯉の兜	二七三
七	阿部家の浪人	二七五
八	日本一の名馬	二七九
九	自ら知る事	二八三
一〇	阿部忠秋鶴を放つ	二八七
一一	けん女の忠孝	二九〇

一二日	焼けた父	二九四
一三日	吉田松陰の士規七則	二九八
一四日	豊公の鶴逸す	三〇一
一五日	楚王弓を亡ふ	三〇三
一六日	玩具の牛を作る男	三〇六
一七日	與謝蕪村の壁書	三〇九
一八日	有馬涼及寝ながら見る櫻	三一三
一九日	涼及百貫の茶碗	三一四
二〇日	五神通の眼を抉る	三一六
二一日	不死の家なし	三一八
二二日	謙信兄三郎を討つ	三二一
二三日	床しい大學者	三二三
二四日	境遇と態度	三二五
二五日	半分は垢	三二七
二六日	橋本左内一心の訓	三三〇
二七日	紀伊治長節儉の誠め	三三二

二八日	島津義久とその愛女	三三三
二九日	無一物を求む	三三七
三〇日	利根が鈍根か	三四一

五月

一日	大内義隆の辞世	三四三
二日	老僧の接木	三四六
三日	臆病者の川越え	三四八
四日	聖書の愛敵訓	三五一
五日	橋本左内の篤行	三五三
六日	春臺顯貴に屈せず	三五五
七日	山内一豊の妻	三五八
八日	林檎の味ひ	三六一
九日	何ぞ畏んや	三六四
一〇日	僧丈草家を出づ	三六六
一一日	佐々成政雪を詠す	三六八

一二日	慌てた手紙	三六九
一三日	山中にも楽しみあり	三三三
一四日	尊徳善く教ふ	三七四
一五日	白石友に譲る	三七七
一六日	木箱に怒る	三三九
一七日	他人の毀譽	三八二
一八日	重治部下を論ず	三八四
一九日	清水宗治の俠死	三八六
二〇日	愚人子を殺す	三八八
二一日	衆生の恩	三九〇
二二日	重治とその子の小便	三九三
二三日	鳥の秀家	三九四
二四日	一頭缺けた牛	三九七
二五日	四苦八苦の説	四〇〇
二六日	井伊直孝の歸國	四〇五
二七日	一九初めて蜀山人を訪ふ	四〇七

二八日	番頭の百年目	四一一
二九日	何人も施すべし	四一三
三〇日	中島可之助の「可」	四一五
三一日	良寛上人の無慾	四一七

六月

一日	過たる鹽	四二一
二日	人命日々に減損す	四二三
三日	矢頭右衛門の東下	四二五
四日	福島三片輪	四二八
五日	短氣な主人	四三〇
六日	人の慾	四三三
七日	厨宰坪内の氣焰	四三八
八日	本多忠籌贈賄せず	四四一
九日	意地の汚い者	四四三
一〇日	自然の道	四四四

一一日	後徳大寺屋根の窩	四四七
一二日	佛行坊の無我無心	四四九
一三日	寝小便小僧	四五二
一四日	畠山重忠の覺悟	四五四
一五日	大西郷の大腹中	四五六
一六日	佛行坊と山法師	四五九
一七日	犬の言と人の目	四六一
一八日	愚を守る	四六五
一九日	兼行と樹上の僧	四六九
二〇日	鳥巢和尚と白樂天	四七二
二一日	歸路の遠近論	四七五
二二日	孫子の説難	四七六
二三日	五竹坊無我の心持ち	四八〇
二四日	玄武坊自ら重んず	四八三
二五日	行燈の置き場所	四八五
二六日	人命幾はくの間か	四八七

二七日	俳人一茶の怪氣焰	四八九
二八日	房州邸の山鹿素行	四九三
二九日	妙な御祈禱	五〇〇
三〇日	洗濯倉に安んじた家康	五〇二

七月

一日	子與の病氣	五〇五
二日	山鹿素行自ら誓しむ	五〇八
三日	惟然坊風狂す	五〇九
四日	惟然旅に芭蕉を伴ふ	五二二
五日	新煙管	五二四
六日	貧女阿難の供養	五二六
七日	内藤平左衛門の隠徳	五二八
八日	子路石門に宿す	五三二
九日	釋尊と妻の布施	五三六
一〇日	法を念するの徳	五三八

一一日	熊澤蕃山吉野山に入る	五三〇
一二日	荻生徂徠大學を自習す	五三二
一三日	村人牛を偷み食ふ	五三四
一四日	太田錦城抑宇の誠め	五三六
一五日	性惠法親王と池の蛙	五三七
一六日	大久保彦左衛門とうは狐	五四一
一七日	禿頭の治療法	五四三
一八日	布の一袋	五四七
一九日	仁齋の雅量	五五二
二〇日	仁齋夷然たり	五五四
二一日	娘の兩肌脱	五五六
二二日	賢人の智	五五八
二三日	人の皮を茹る	五六一
二四日	野坡盗人と語る	五六二
二五日	福島正則の諦めぶり	五六七
二六日	鬼棲む空屋	五六二

二七日	自然任せの淡生涯	五七五
二八日	手車の翁	五七八
二九日	藤原惺窩の寛仁	五八〇
三〇日	財産二つ割り	五八三
三一日	世の妨げを爲すもの	五八七

八月

一日	奇人飢を恐れず	五八九
二日	胡麻の蒔き損ひ	五九二
三日	小野寺十内の書	五九三
四日	山人の一歌	五九六
五日	蜀山人の壁書	六〇〇
六日	己惚れ男	六〇二
七日	太公の人物鑑定	六〇四
八日	横井小楠の機智	六〇六
九日	盛親僧都の傍若無人	六〇九

一〇日	何方が馬鹿……………	六二四
一日	白樂天の座右銘……………	六二七
二日	陶侃の瓶運び……………	六三一
三日	新井與治右衛門の教訓……………	六三三
四日	餓ゑたる團子……………	六三五
五日	西郷南洲の事勳門……………	六三八
六日	大陽寺左平次誇らす……………	六三一
七日	日蓮信仰の力……………	六三四
八日	べつかつ孝……………	六三八
九日	新鷲の他力信心……………	六四〇
十日	森金吾の貧生涯……………	六四七
十一日	河村鍊隨軒薪を惜しむ……………	六四九
十二日	百萬長者を望む男……………	六五三
十三日	勉學にてもよし……………	六五七
十四日	上人念佛者に答ふ……………	六六一
十五日	畫家百谷の妻……………	六六五

二六日	鴛鴦の眞似……………	六六九
二七日	時の信と人の信……………	六七五
二八日	伊藤仁齋仕へず……………	六八六
二九日	仁齋の井戸浚へ……………	六八〇
三十日	四足よりも六足……………	六八一
三一日	外を修めて内に及ぶ……………	六八三

九 月

一日	高山彦九郎欺かる……………	六八五
二日	北條泰時訟へを聴く……………	六八九
三日	門と壁と繩とを守る僕……………	六九四
四日	基督の今日主義……………	七〇〇
五日	松下禪尼障子の切張……………	七〇一
六日	明慧上人足と阿字……………	七〇三
七日	口先のみの一萬兩……………	七〇七
八日	簡略の戒め……………	七一〇

九日	梶子と百合子	七二五
一日	玉瀾 可行	七二六
一日	見榮坊の大失敗	七三〇
二日	荀子の性悪説	七三三
三日	大石良雄仁齋に学ぶ	七三七
四日	荻生徂徠の博學	七四〇
五日	齋人その妻妾に驕る	七四二
六日	王陽明の尊維閣記	七四三
七日	俳人瓢水奇行多し	七四七
八日	俳人北技拘はらず	七五一
九日	我が影に怒る人	七四七
二〇日	養ひ飼ふもの	七四九
二一日	僧似雲の春雨亭	七五一
二二日	櫻井吏登の清貧生活	七五五
二三日	富家の墻壞る	七五七
二四日	眞木和泉の節義訓	七五八

二五日	西郷南州の大至誠	七六〇
二六日	三村次郎左衛門の加盟	七六三
二七日	摩訶蜜の七人娘	七六六
二八日	次郎左衛門と内藏助	七六九
二九日	公子荆善く家を理む	七七一
三〇日	青山候の士の豪放不羈	七七三
十 月		
一日	火中の蛇	七七七
二日	婦人に七去あり	七八一
三日	従客死に就く忠與の妻	七八三
四日	黒田長政殿様藝	七八七
五日	所望の鬚剃り役	七八九
六日	朝三暮四と朝四暮三	七九四
七日	子路と隠者	七九六
八日	別所小三郎一死部下に代る	七九九

九	日	懶惰漢の望み	八〇二
一〇	日	杉田玄白の七不可	八〇三
一一	日	福島正則國除かる	八〇四
一二	日	大石内蔵助と愛妾輕女	八〇八
一三	日	仙人の指	八一三
一四	日	畢竟老と死	八一六
一五	日	僧寂室弟子に教ふ	八一九
一六	日	家康と名の残し方	八二二
一七	日	方角違ひの答へ	八二四
一八	日	朋友の道	八二七
一九	日	畫家大雅堂の奇行	八三〇
二〇	日	大雅權貴に届せず	八三三
二一	日	この榮螺十六文	八三六
二二	日	不變の友誼	八三九
二三	日	大雅の奉納物	八四三
二四	日	孔子と隱者	八四六

二五	日	怒易き人	八四九
二六	日	交際の心得	八五一
二七	日	佛光禪師と北條時宗	八五三
二八	日	佛光禪師の解脱ぶり	八五五
二九	日	近道好きの失敗	八五八
三〇	日	外貌と内心	八六一
三一	日	中山忠宣	八六四

十一月

一	日	乞食桃水と歸依の尼某	八六七
二	日	桃水とその二弟子	八七一
三	日	黒馬の尾が白い?	八七四
四	日	簡易な生活	八七七
五	日	桃水弟子に示す	八七九
六	日	林羅山の銅庫焼く	八八二
七	日	進物の八年母	八八五

八	忍の徳	八八七
九	石川丈山の隠遁生活	八八九
一〇	俳人白雄明日を期せず	八九四
一一	盲人の提灯	八九七
一二	駱駝の皮剥ぎ	九〇〇
一三	佛の慈悲	九〇二
一四	石川丈山舊を忘れず	九〇五
一五	蒲生氏郷の名言	九〇七
一六	旅人剽盗に出遇ふ	九〇九
一七	多慾と少慾	九一一
一八	某候の鑼定眼	九一三
一九	西郷南州逃げ磔を厭ふ	九二〇
二〇	夫婦無言の約束	九二三
二一	豊太閤の遊女屋覗き	九二五
二二	太閤の應對ぶり	九二八
二三	食はずに生きる奇術	九三〇

二四	勇のさまさま	九三三
二五	前田利常の大罌丸	九三五
二六	伊達政宗の木刀	九三八
二七	片意地五人男	九四〇
二八	塞翁喜憂せず	九四四
二九	細川忠興の妻	九四八
三〇	猛敏鍋を落す	九五三

十二月

一	命と格別	九五六
二	橋本左内の立志訓	九五八
三	木場利兵衛仁義禮智信	九六三
四	鮭延主従の親み	九六六
五	等分に混ぜた茶と珈琲	九六八
六	四種の忍耐	九七二
七	上杉謙信必死の猛體	九七四

八	山岡鐵舟の大言	九八〇
九	たつた一つの鶏卵	九八四
一〇	鏡に哭く人怒る人	九八七
一一	甲斐の徳本食らす	九九一
一二	横井也右の名言	九九三
一三	夫の早飯食ひ	九九五
一四	世人よく讒舌す	九九七
一五	一僧大雅を求む	九九九
一六	蒲生の士よく敵を射る	一〇〇一
一七	驢馬の乳	一〇〇三
一八	極樂の先裏	一〇〇四
一九	目野資朝とむく犬	一〇〇八
二〇	證空上人悔ゆ	一〇一四
二一	盗人の泣く面	一〇一六
二二	天爵と人爵	一〇一八
二三	千代女尼となる	一〇二〇

二四	伊勢長氏の仁政	一〇二七
二五	机の上から種蒔を	一〇二八
二六	久米の仙人通を失ふ	一〇三〇
二七	元就と儒臣某	一〇三三
二八	酒を強ふる事	一〇三五
二九	太閤欺きを容る	一〇三七
三〇	丘吾子水に投ず	一〇三九
三一	フランクリンの十二徳目	一〇四六

— 目次終 —

一日
話

修養の泉

山田至人著

子曰。君子不重則
不威。學則不固。



一の一 結解某の高義

◇士に貴ぶ所は、その節義あるを以てなり。「頼山陽」

寛永 正保の頃と傳ふる。江戸芝天徳寺境内に、常念佛といつて、絶えず、念佛を唱へる脇寺があつた。或る日の夕暮近く、住持が、他へ出かける時、桐油包みを頸にかけた、上品らしい老人が、門前に佇んでゐるが、程經つて、歸つて來ると、前の老人が、依然として、佇んでゐる。不思議に思つて、
 「何方ですか。此方へ入つて、お休みなさい」と、言葉をかけた。老人は、
 「念佛の聲の殊勝さに、最前から、時を移してをります。それでは、お茶一つ、頂戴いたしませう。」と、内へ入つた。
 住持は、早速、茶を侷めて、

『して、どこからお出でなすつた？ 何方へお越しなさるので？……』
『手前は、奥州から来た者でございませぬ。當江戸に、昔し知り合つた者がありま
すので、遙々、尋ねて来ましたけれど、久しい事で、今は、行方も判りませぬ。
これから、どこへなり、身を寄せたいと思つてをります。』との答へに、住持は、
氣の毒に思つて、

『それは、お困りでせう。最早、日も暮れました。今晚は、こゝでお寢みなさる
が宜しい。』と、一宿させ、翌朝になると、

『落ちつかれる先も、まだ、定つてゐないやうに承はりました。それ迄は、幾
日でも、お宿しませう。ゆつくり、御逗留なさいませぬ。御遠慮には及びませぬ。』
と勧めた。老人は、厚く、住持の好意を謝し、

『では、お言葉に従ひまして……』と、その儘、常念佛に留まつた。
さて、伺くれと、話をして見ると、古い事などを記憶えてゐて、何うやら、た
い人ではないらしい。住持は、斯くと、天徳寺の和尚に告げた。和尚も、一見、
この老人に於て、發見する所があつたのか、後には、本坊へ招き入れ、扶持、懇

ろに、寺中の事を打ち任せた。老人は、諸事、残る所なく、取り捌き、弟子の僧
たちの取り締まりにもなつたので、和尚を初め、大切な人として待遇した。内外
の誰れ彼れも、皆、敬服した。

時に、某諸侯の隠居が、

『年も老け、古事に通じてゐて、伽になる人があつたら、召し抱へたい。俸祿
も、手厚く當てがはう。尤も、國賓として優遇する。』といつて、然るべき人を搜
してゐた。聞き込んだ檀家の某は、

『それなら、あの人がよい。』と、急ぎ、天徳寺へ報して來た。

すると、老人は、

『手前、奉公の望みはございませぬ。これ迄は、申さずをりましたが、斯やう
に御懇意の上は、何をか隠しませう。』と、こゝに初めて、素性を明し、本名を名
乗つた。

『手前、まことは、蒲生氏郷の家來で、結解と申します。蒲生の家が亡びて後
は、他家に仕へる心はなく、縦ひ、乞食になる迄も、行き倒れる迄も、覺悟を

定めてをりましたが、存じも寄らず、當寺の御恩を受けるやうなことになるました。」と、感慨も淺からず、

「が、今は、御恩も報じかねます。」と、悄然として物語り、九戸合戦、その他で、氏郷から與へられた感状やら、諸侯からの招きの書状やらを取り出して、座中の者に見せ、

「最早、これも、無用になりました。」とばかり、その場で、焼き棄て、しまつた。

斯くて、幾年かを経る程に、明曆の大火があつて、天徳寺も、類焼の厄に罹つ

たが、その際、結解は、

「手前にお任せ下さい。」と請うて、和尚以下を立ち退かせ、たゞ一人、猛火の下を掻い潜り、黒烟の間を馳せ廻つて、佛像、經文、その他、諸道具に至る迄、一つ残さず、他へ運ばせ、

「最早、思ひ残すこともない。お前たちも、早く退けよ。早く、早く……」と急ぎ立て、僕等をも立ち退かせた。そして、その身は、頑として、動かなかつ

た。

火が、焼け通つて後ち、堂間の焼跡に、手を拱ぬき、結跏趺坐の儘、形も崩さず、焚け死んでゐる者があつた。見ると、由解老人であつた。天徳寺の和尚、常念佛の住持、凡そ、面識のある者は、涙を流して、悲しみ合ひ、惜しみ合つた。

赤穂の會議に、大野九郎兵衛が、切りに、軟論を唱へた時、大石良雄は、義字を擧げて、これを戒しめた。

士に貴ぶ所は、義なり、士にして、義なくんば、必らず、辱しめらる。今、大節に臨みて、大義を以て自ら任せず、顧りて、死を畏れて、苟くも免れ、唯々として、上を奉ずるを務めと爲す。亦た、恥ぢなきの甚だしきにあらず

や。「赤穂義人録」

士に貴ぶ所が、義の一字に在ることは、古來の定論である。何人も疑はぬ。抑も、義とは何？ 韓退之の原道には、行つて宜しくする、これを義といふ。

と見え、朱子の解には、

義は、宜なり。

とある。宜しきに從つて、言行を制するのが、義である。手つ取り早く、「宜しい」のが、義である。

例へば、臣として、君に忠を勵むのは、宜しい。即ち、義である。子として、親に孝を盡すのは、宜しい。即ち、義である。夫婦の相和する、朋友の相信する、親子、兄弟の、相敬愛するの類、皆、行ひの宜しきもので、即ち、義である。

「義は、宜なり。」——義の本義は、恐らく、こゝに在るのでめらう。けれど、我が國に、義士とか、義民とかいふ、その義には、一種、特定の意味があるらしい。

それは、犠牲といふことである。君の爲め、國の爲め、社會、同胞の爲めには、一死と雖も、敢へて辭しない。況んや財産をや、況んや名譽をや、との犠牲的感情、献身的行爲、これを義とし、その人を稱して、義士とし、義人とするの

である。孔子曰く、

身を殺して、仁を成す。

と。これ、義の要約である。

義士や義人は、何等の理由があつて、這般の犠牲的行爲に出るか。一概にはいへないが、古來の義士、義人中、君國、同胞の恩を思ふが爲めに、これに酬ひんと欲して、一命を抛つた者の少くないことは、疑ひのない所である。赤穂義士の如きは、確かにそれで、内藏助の小刀には、

萬山不重君恩重。一髮不輕我命輕。

(萬山、重からず、君恩重し。一髮、輕からず、我が命輕し。)

の銘があり、小野寺十内の辭世は、

忘れめや、百に餘れる、年を経て、仕へし君が、世々の情を。

と讀まれた。これ、四十七人を通じての心情であつたのである。今、結解某の高義を見るに、亦た、報恩の一念に由來する。主人蒲生氏郷の家が亡びて、復た、他に主取りをしなかつたのは、舊主の恩を思ふの切なる、二君

に仕へて、苟くも、生を食るに忍びず、寧ろ、主家と運命を共にせんことを願つたのである。

然るに、計らず、常念佛や天徳寺の恩を受けた。その恩も、報ひなければならぬ。心、久しく、蒲生家に殉してゐた彼れも、今は、死ぬに死なれぬ破滅となつた。常に思つた、

『何とか、報恩の機を得たい。最早、この世に用のない身、それを境ひに、死んで退かう。』と。

然る程に、明暦の大火となつて、恩義の寺も、哀れ、類焼せんとする。

『今こそ……』と、散々、寺の爲めに働いた揚句、その所謂無用の身を、火中に投じ去つたのである。高義、感ずるの外はない。

先頃の大地震は、次に大火災を以てして、あたり、帝都を焦土と化し、焼死者十萬と稱せられる。明暦の大火にも、同様の惨害があつたらしく、今の兩國回向院が、當時の焼死者を葬つた遺跡であることは、誰れも、知つてゐる。明暦の大火には、義人結解某があつた。大正の大火には、如何？ 吾等は、然うした義

人の義舉の、細大洩らさず、拾ひ蒐められて、輕薄時代の警策たらんことを切望するものである。

一の二 坂本龍馬の南洲評

◇大きく叩けば、大きく鳴り、小さく叩けば、小さく鳴る。「坂本龍馬」

海南の豪傑で、

『或ひは、西郷南洲よりも大きかつたかも知れぬ。』との評のある坂本龍馬も、勝海舟の識見には、少からず敬服して、遂に、その門人となり、海軍術を學んだ。當時、郷里の姉へ寄せた書中に、

今にては、日本第一の人物勝麟太郎といふ人に弟子入り致し……の一節がある。

その龍馬、或る時、その海舟の指圖によつて、南洲を訪問したが、それ限り、

何の復命もしない。二日経つても、三日経つても、たゞ、黙つてばかりゐるの
で、海舟は、堪りかねて、

「西郷は、何んな人物だつたかい？」と、試みに問うた。龍馬は、

「あれは、馬鹿でござる。たゞ、馬鹿の幅が判りません。大きく叩けば、大きく
鳴り、小さく叩けば、小さく鳴る。残念なるかな、撞木に手應へが薄うござつ
た。」と答へた。

海舟、評して曰く、

評したる人も評したる人、評せられたる人も評せられる人。
と。

龍馬、果して、南洲よりも大きかつたか。南洲、果して、龍馬よりも小さかつ
たか。それは知らぬ。たゞ、南洲は、無我の人であつた。そして、無我は、大我
である。

我れといふ、小さき心、捨て、見よ。大千世界、障るものなし。

天地、萬物と一體を相成し、山川、國土をさへ我れとする無我の人は、世に
も、偉大の極みでなければならぬ。

南洲が、無我の人であつたとは、如何？ 彼れは、君國の爲め、同胞の爲め
に、我が一身を忘れた。家を思はず、財産を思はず、名を思はず、官爵を思は
ずして、一に、至情の已むを得ざるに従つて、君國の爲めに謀り、同胞の爲めに
憂へた。

至情の已むを得ざるに従ふ——これを自然と見てもよからう。有我、我執の人
は、左右、無理をする。身の爲め、家の爲めといはない迄も、強ひて、我が意を
押し徹さうとするが爲めに、無理が出来、不自然に陥る。南洲には、それがなか
つた。そのいふや、至情の已むを得ざるをいひ、その行ふや、至情の已むを得ざ
るを行ふ、といふ風で、我意を張らうとの考へは、毛頭なく、従つて、無理にも
……といふことがなかつた。言行、共に、風の吹き、水の流るゝが如くに自然で
あつた。孔子は、
意なく、必なく、固なく、我なし。

といふ種類の人であつたといふ。南洲も、それに近かつた。

であるから、人と語つても、多くは、相手の意見を聞くに止まつて、自説を説くことがなかつた。我が主張の下に、相手を屈服させやうとか、驚天動地の大議論を吐いて、烟に巻かうとか、自分の學識を見せつけやうとか、あつといはせやうとか、感心させやうとかいふ、小野心、小名譽心はなく、たゞ、至情の已むを得ざる所を披瀝した。一點、人工的の所がなかつた。作爲の跡がなかつた。即ち、自然的であつた。

従つて、その應答も、相手の出方次第で、天下の大問題を提けて、大きく叩けば、大きく鳴つた。一身の小問題を取つて、小さく叩けば、小さく鳴つた。龍馬の評は、畢竟、南洲の應對振りの、無我であり、自然であることを道破したのである。

天保の革命家大鹽平八郎は、

心は、これ、一虚鑑。森羅萬象、明かなり。洪鐘、その内を虚しくす。大聲を發する所以。

といつてゐる。「洪鐘、その内を虚しくす。」——鐘は、内部が、空虚である。無我である。「大きく叩けば、大きく鳴り。小さく叩けば、小さく鳴る」所以である。谷も、その中が、空虚である。無我である。これに向つて、大きく叩けば、大きく應へ、小さく呼ば、小さく應へる所以である。以て、南洲の事を譬へるに足らう。

「心は、これ、一虚鑑。」——否、一虚鑑でなければならぬ。研ぎ澄して、一點の曇りを留めぬ明鏡の如き心でなければ、「森羅萬象、明かなり。」といふわけには行かぬ。我れとか、慾とかの爲めに、曇つたり、曲つたりしてゐるたのでは、前に現はれる所の物々を、さながらには寫しかねる。相手次第といふわけには行かぬ。

さはれ、人は、無我の人でなければならぬ。今の世、學問の人はある。手腕の人はある。藝術の人はある。政治家、教育者、軍人、官吏、商人などとして、絶れた人はある。無我の人南洲の如きは、一人もない。而も、無我的人がないのは、大人物がないのである。今の日本を見渡す毎に、吾等は、

團栗の脊競べ。

の諺を想ひ起す。

子貢、問うて曰く……今の、政に従ふ者は、何如。子曰く、あゝ、斗筭の
人、何ぞ算ふるに足らん。
とは情けない。

一の三 耳の乾物

◇論語讀みの論語知らず「日本俚諺」

或る男、運好く、極樂参りをして、觀音様に伴はれ、彼方、此方、見物して歩
くと、一つのお堂があつて、四方に吊られた棚の上には、木耳が、山のやうに積
まれてある。驚いて、
「夥しい木耳ですこと！ あれは、佛様がたが召し食うのですか。」

觀音様は、

「否々、あれは、木耳ではない。」との仰せ。

「では、何でせう？」

「娑婆にゐる時、聖賢の教へを聞いて、成程とは思ふけれど、それを實行しない
不心得者が死ぬと、體は、無間地極へ落ちて、耳だけが、極樂参りをする。あれ
は、その耳ぢや、耳の乾物ぢや。」とのことに、亡者は、ぞつとした。

四書、五經を初めとして、聖賢の書は、數多ある。佛敎の經文、耶蘇敎の聖
書、何れ、結構な敎訓ならぬはない。苟くも、精神を修養して、人らしき人とな
らうの志のある者には、是非、一讀の必要があるが、その書を読み、その説を
聞いただけでは、何にもならない。これを實行して、學問、初めて、その效があ
る。少くも、實行の誠意がなくてはならぬ。然らざれば、「論語讀みの論語知ら
ず。」の譏りがあらう。程子の語に、

今の人、書を読むことを會せず。論語を読むが如き、未だ讀まざる時、こ

れ、これ等の^{ひと}人。讀^よみ了^をりて後^のち、又^{また}た、たゞ、これ、これ等の^{ひと}人。便^{すな}はち、これ、曾^かつて讀^よまざるなり。

これでは詰^{つま}らない。死^し後^ごを案^{あん}するに、この人、耳^{みみ}だけは、極^{ごく}樂^{らく}へ往^ゆかうも知^しれぬが、體^{からだ}は、無^む間^{けん}地^じ獄^{ごく}へほたと墮^おちて、萬^{まん}劫^{きゃく}末^{まつ}代^{だい}、浮^うぶ瀬^せがあるまい。が、平^{へい}生^{せい}、營^{えい}利^りを事^{こと}として、論^{ろん}語^ごのろの字^じも知^しらない者が、人^{ひと}の論^{ろん}語^ごを語^{かた}るを聞^きいて、

「君^{きみ}も、「論^{ろん}語^ご讀^よみの論^{ろん}語^ご知^しらず。」ぢやないかね? ふゝむ。」と鼻^{はな}先^{さき}で嗤^{わら}つて除^のけ、痛^{つら}快^{かい}がり、得^{とく}意^いがるのも、小^{せう}人^{じん}、賢^{けん}を厭^{いと}ふ腹^{はら}綿^{わた}が見^み透^すされて、實^{じつ}以^いて、片^{かた}腹^{はら}痛^{いた}い。

蓋^{けだ}し、修^{しう}養^{やう}にも、階^{かい}段^{たん}がある。一^{そく}足^と飛^とびに、聖^{せい}賢^{けん}の域^{いき}に至^{いた}り得^うるものではな

い。孔^{こう}子^し曰^{いは}く、
これを知^しる者^{もの}は、これを知^しる者^{もの}に如^しかず。これを知^しる者^{もの}は、これを知^しる者^{もの}に如^しかず。
と。聖^{せい}人^{じん}の道^{みち}も、知^しつただけでは、一^{かう}向^{かう}、詰^{つま}らぬ。これを知^しる者^{もの}に至^{いた}つて、初^{はじ}め

て、實^{じつ}行^{かう}があるが、尙^なほ、充^{じゆう}分^{ぶん}ではない。道^{みち}と人^{ひと}とが、別^{べつ}々^{べつ}になつてゐて、その人^{ひと}、動^{うご}もすると、道^{みち}から離^{はな}れやうとする。更^{さら}に進^{すす}んで、道^{みち}を樂^{たの}しみ、道^{みち}に安^{やす}んずるに至^{いた}らなければならぬ。斯^かくてこそ、道^{みち}と人^{ひと}と、兩^{りやう}々^{りやう}、一^{たい}體^{たい}を相^{あひ}成^なし、人^{ひと}の行^{こう}ふ所^{ところ}、自^じ然^{ぜん}にして、道^{みち}に叶^{かな}ひ、努^{つと}めずして、道^{みち}を實^{じつ}行^{かう}することが出^で來^きる。これを修^{しう}養^{やう}の階^{かい}段^{たん}とする。

それ、階^{かい}段^{たん}である。一^{だん}段^{だん}又^{また}一^{だん}段^{だん}と、下^{した}から始^{はじ}めて、順^{じゆん}次^じ、上^{うへ}へと登^{のぼ}つて行くの外^{ほか}はない。道^{みち}を樂^{たの}しみ、道^{みち}に安^{やす}んずる最^{さい}上^{じやう}級^{きゆう}も、本^{もと}はといへば、道^{みち}を知^しる最^{さい}下^げ級^{きゆう}に在^ある。先^まづ、知^しることがあつて、然^{しか}る後^のち、好^{この}むことがあり、樂^{たの}しむことがある。知^しつただけでは詰^{つま}らぬが、知^しらないよりは、勝^{まさ}しである。古^こ人^{じん}の歌^{うた}に、
論^{ろん}語^ご讀^よみの、論^{ろん}語^ご知^しらずは、まだもよし。論^{ろん}語^ご讀^よまずの、論^{ろん}語^ご知^しらずは。

彼^かれは、永^{えい}久^{きう}の愚^ぐ人^{じん}でなければならぬ。
のみならず、讀^よみ讀^よみする中^{うち}には、意^い味^みが解^{わか}つて來^きる。面^{おも}白^{しろ}くなる。面^{おも}白^{しろ}いから、一^{そう}層^{そう}讀^よむ。熱^{ねつ}心^{しん}に讀^よむ。益^{えき}す、味^{あじ}ひが出^でて來^きる。飯^{いし}を食^くふ間^ま、電^{でん}車^{しゃ}に乗^のつた時^{とき}、常^{じやう}住^{じゆう}坐^ざ臥^わに、聖^{せい}賢^{けん}の教^{きやう}へが、自^じ分^{ぶん}の頭^{あたま}を占^{せん}領^{りやう}する。忘^{わす}れられぬ。考^{かん}へざるを

得ぬ。斯くて、次第に、その薰化する所となつて、性格迄が一變する。讀む所聞く所が、何時しが、我が人格の有力なる一要素となる。結局、我が行爲の上にも顯はれずにある。

果して然らば、「論語讀みの論語知らず。」の譏りが物かは？ 論語、讀むべきである。聖賢の旨、知るべきである。

一の四 西郷南洲の至誠訓

◇誠は、天の道なり。これを誠にするは、人の道なり。「中庸」

一、道は、天地自然の道にして、人は、之を行ふものなり。故に、天を敬するを以て目的となす。天は、人も、我も、同一に愛す。故に、我を愛する心を以て人を愛すべし。

一、人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを盡し、人を咎

めず。我が誠の足らざるを尋ねべし。

一、平生、道を踏まざる人は、事に臨みて狼狽し、處分に苦しむものなり。例せば、出火の時、平生、處分あるものは、動搖せずして、取仕末も、能く出来るべしと雖も、平生、處分なきものは、唯、狼狽して、措く所を知らざるに至る。左れば、平生、道を踏み居るものに非ざれば、事に臨み、策略は出でざるなり。

一、事の上にて、機會と稱ふるもの、二あり。僥倖の機會あり。設け起す機會あり。世人の稱ふる機會は、多く、僥倖の機會を指して言ふなり。然れども、眞正の機會とは、理を盡して行ひ、勢をつまびらかにして動くにあり。大事に臨みては、機會は、是非、引き起さざる可からず。

一、人を籠絡して、陰に、事を謀るものは、其の事、成ると雖も、活眼より之を看れば、其の醜、言ふ可からず。人に推すに、公平、至誠を以てせよ。至誠、公平ならざれば、決して、英雄の心を攪ること能はず。

一、命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るなり。此始末に困る人ならでは、艱難を共にし、國家の大業を成すこと能はず。然れども、

此の如き人は、凡俗の眼には見る可からず。

一、剛膽なる所を學ばんと欲せば、まづ、英雄の爲せる跡を観察し、且つ、事業を翫味し、必らず、身を以て其の事に處し、安心の地を得べし。然らざれば、唯だ、英雄の資のみありて、爲す所を知らず。眞の英雄と云ふべからず。この故に、英雄の事に處するとき、如何なる膽力ありやを試験し、其の及ばざるもの、足らざる所を研究、勵精すべし。思ひ設けざる事に當りて、一點、動搖せず、泰然として、其の事を斷ずる所に於て、平日養ふ所の膽力を長すべし、「西郷南洲」

以上、西郷南洲の教訓七個條、一言、以て、これを蔽へば、「誠なれ。」といふに在る。

誠とは、如何？ 人、口を開けば、誠を云々し、

「拙者は、誠心誠意でござるぞ。」などと威張る。知つていふか、知らずしていふか。

朱子は、眞實無妄の四字を以て、誠を解した。簡單に過ぎる。

已むを得ざるに出づる、これ、誠なり。

といつた人もある。物足りない。彼れも、此れも、説き得て十分なるものではない。

誠とは、如何？ 吾等の所見を以てすれば、誠は、至情である。一言一行、至情の已むを得ざるに出でて、他に、何等の理由もない。君に忠を勵む。それは、君を思ふ至情の爲で、恩賞に與からうの、御加増を賜はらうのといふ、不純な考へがあつてのことではない。親に孝を盡す。亦た、親を思ふ至情の故で、孝子の名を揚げやうの、父の遺産を僥倖しやうのといふ、蕪雜な野心があるではない。たゞ一片の至情があるばかり、それ以上、何の理由をも混有しない所の、純なる感情、純なる意志、その發露なる、純なる行爲——これを稱して、誠といふのである。

果して然らば、成程、誠は、眞實無妄のものに相違はない。「已むを得ざるに出づる、これ、誠なり。」と見て、誤まらぬ。

至情の已むを得ざるに出るのは、いひ換ふれば、自然に出るのである。常に、

名利の爲めなどいふ、穢い理由がないばかりではなく、善であるから、道であるからといふ、道徳的の計量もない。それは、全く、自然である。親が、その子を愛するのに、何の爲め、彼の爲めといふ理由はない。至情、已むを得ずして愛するのである。自然にして愛するのである。

誠は、自然である。自然は、天である。故にいふ「誠は、天の道なり。」と。誠は、天の道であつて、人の生有する所である。天の人に賦與する所である。天の賦與する所に従ふの外、人の道はない。故にいふ、「これを誠にするは、人の道なり。」と。

通例、人の道といひ、道徳といふものは、多岐多端に互つて、而も、誠に至極する。誠は、道の至極である。如何なる道も、それが、誠にならなければ、本當ではない。名利の爲めなどいふ、打算的の善が、取るに足りないは勿論、善であるから、道であるからなどの理由のつく善も、善の眞なるものではない。至情の已むを得ざるに出づる自然の善、自然の道のみが、眞の善、眞の道である。であるから、吾等をしていはしむるならば、カントの嚴肅主義などは、到底、

一知半解の説たるを免れぬ。

それ、自然である。何人と雖も、誠を行ふに堪へる。至情の儘を行へば、それが、眞の善である、眞の道である。大學にこれあり、心、誠にして、これを求むれば、中らずと雖も、遠からず。未だ、子を養ふことを學びて、而る後ち、嫁する者はあらざるなり。

中庸にこれあり、

誠は、勉めずして中り、思はずして得。

亦た、この心に外ならぬ。

誠とは、斯うしたものである。南洲は、斯うした誠の人であつた。誠の人に、誠の言のあつたこと、不思議ではない。試みに、上掲七個條の言を誦せんか「天地自然の道」は、誠のことである。

人を相手にすれば、名聞、利養の慾が出来る。不純な考へが起る。誠は、到底、

何事が起らうとも、誠を以て申ればよい。「心、誠にして、これを求むれば、申

らずと雖も、遠からず。』で、誠の中、自ら、適當の處分がある。狼狽するには當らない。動搖するには及ばない。

僥倖を願ふのは、小人、小才子の事である。この輩、勿論、誠を知らぬ。誠は、力である。至情は、力である。孟子も、

至誠にして動かざる者は、未だ、これあらず。

といつてゐる。籠絡手段が、何にならう？ 誠の人は、斷じて取らぬ。

誠の人は、無我、無慾の人でなければならぬ。

剛膽は、英雄の通有性である。畢竟、誠から來てゐる。無我、無慾、命も、名

も、金も、位も、眼中になくして、たい、至情の已むを得ざる所に従ふ。剛膽

は、當然である。孔子の語に、

根や欲。焉んぞ、剛なるを得ん。

といへる。以て、反證とするに足らう。

維新の俊毫、吾等は、最も、南洲を推す。智略の故ではない。識見の故ではな

い。武勇の故ではない。學問の故ではない。實に、誠の人であつたからである。

一の五 長兵衛と十郎左衛門

◇君子は、貞にして諒ならず。「孔子」

幡隨院長兵衛は、木挽町森田座での喧嘩に、水野十郎左衛門の配下金時金左衛門を取つて壓へ、且つ、棧敷の十郎左衛門を嘲り罵つた。

十郎左衛門は、祿五千石を食み、旗本奴の随一人として、平生、猛暴の振舞多く、江戸市民の苦しむ所となつてゐた。町奴の長兵衛等は、何とか、これに一撃を與へたいものと、その機を窺つた。今や、その機が発見された。町奴等は、三斗の溜飲を下けることが出来た。

それだけに、十郎左衛門は、口惜しがつた。

後ち三日、數人の従者を従へ、馬上、長兵衛を訪ねた武士がある。

「拙者は、水野十郎左衛門の使者でござる。」との事に、長兵衛は、これを座敷へ

通して、

『して、御用の筋は、何でござりまする？』と問うた。使者の曰くに、

『主人十郎左衛門事、久しく、貴殿のお名前を承はり及ぶ所、先日、森田座に

於て、お腕前を拜見し、益す、感心致してござる。就いては、世評は左にあれ、

十郎左衛門は、當つて碎ける男でござる。今後、何卒、昵懇を願ひたく、一度、

お出で下さるやうならば、十郎左衛門、本懐の至りに存する。その爲め、拙者保

正庄左衛門、突然、お伺ひ致した次第。』とある。長兵衛は、その好意を謝し、

『では、明日、参上いたしまする。』と答へた。保正は、満足して辭し去つた。

後で、長兵衛は、思へた。

『彼れ水野は、自分を招いて、怨みを報ひやうとするのに相違ない。といつて、

往かなければ、卑怯の譏りがあらう。唐犬、放駒などに謀るのも、臆したものに

似てゐる。何、死ぬ覺悟でれば、天道、外道、少しも恐るゝに足らぬ。』——斯

う思つた。

乃で、翌日になると、羽織、袴を着け、關孫六作、二尺三寸の刀を帶して、た

い一人、水野邸を訪ひ、中の口から、刺を通じた。近侍の者が出て、

『何卒、玄關からお上り下されたい。』

『否、下賤の者でござりまするから……』

『主人の指圖でござる。遠慮は御無用！』強つての言葉に、長兵衛は、玄關から

上ると、昨日の保正が、面接して、

『暫時、お待ち下されよ。』といふ。所へ、小姓が、茶菓を運ぶ。定光定平、末武

竹右衛門、綱五兵衛——これに保正を加へて、四天王と號した——などが、慇懃

に待遇する。

稍やあつて、長兵衛は、書院へ案内された。刀を去らうとして、又た、萬一を

慮り、帶した儘で、書院へ入ると、上座に十郎左衛門がゐて、

『近う！』と命じ、切りに、長兵衛の勇力、手腕を褒め、

『予の祿は、少いけれど、貴公の爲めになり、これを割くこと、惜しくはない。

左に右、今日は、緩々、話すとしやう。』など、種々、甘言を弄し、盃を執つて

長兵衛に與へた。長兵衛は、深く、光榮を謝して、故意と、返盃しないであつた。

十郎左衛門は、

「盃を……」と所望した。長兵衛は、三拜九拜、膝行して、盃を献じた。時に、侍る所の女は、艶麗、花の如くであつた。二汁、五菜の膳部は、噂に聞く土鼠の汁でなく、蛙の膾でなく、皆、山海の珍味であつた。長兵衛は、少しく意を安んじた。

斯くて、酒の酣はなる頃、

「お風呂が、ようござりまする。」と報じて来た。長兵衛は、勧められる儘に、風呂へ行つた。そして、將に、入らうとする一刹那、十郎左衛門の臣中、力のある數人が、急に迫つて、長兵衛を倒し、高手、小手に縛り上げてしまつた。所へ、十郎左衛門が、刀を提げて、濶歩して来た。長兵衛は、十郎左衛門の卑怯を罵つた。十郎左衛門は、せいら笑つて、

「貴様を縛らうと、久しく、然う思つてゐたのぢや。騒ぐな！」といふと直ぐ、電光一闪、長兵衛を斬つて捨てた。

後ち幾日、長兵衛の死骸は、龍閑橋の下で見出された。放駒等は、憤激して措

かず、他日、必らず、復讐の期あるべきを誓ひ、死骸を收めて、下谷清島町の源空寺に葬つた。

幡隨院長兵衛、唐犬權兵衛などの遊侠の徒、所謂男伊達が、その異様の形装に、江戸市民を驚かしたのは、主として、寛永から寛文へかけての、二三十年間に在つたらしい。抑も、彼の徒の正體は、如何？

彼の徒の標榜する所は、弱きを扶けて、強きを挫く、といふに在つた。弱者の來り請ふことがあれば、決して、可厭とはいはず、而も、一諾を千金よりも重しとして、約を果した。自然、彼の徒の最も貴ぶ所は、勇であつて、最も賤しむ所は、卑怯であつた。苟くも、これ等の本領に違ふことあれば、以て、男子の面目を汚すものとし、これを厭ふこと、蛇蝎の如く、これを恐るゝこと、死の如くであつた。

長兵衛が、森田座の喧嘩に、水野十郎左衛門の四天王の一人金時金左衛門の毒手から、仲間の雷十五郎を救ひ出し、水野主従を罵つて、これに赤恥ぢを搔かせ

たのは、所謂、弱きを扶けて、強きを挫いたものとすべく、水野の詭計と知りつゝ、その巢窟へ飛び込んだのは、卑怯を厭ひ、一死、以て、男子の面目を完うせんとしたものとすよ。即ち、平日、標榜する所を實にし、男伊達の本領を發揮したのである。

が、大體に於て、彼の徒は、一種の遊民に過ぎなかつた。喧嘩と博奕とを商賣のやうに心得、日夜、色里に入り浸つて、酒食に身を持ち崩した所は、到底、破落戸の部類を出なかつた。

弱きを扶けて、強きを挫くの標榜にも關はらず、間々、良民を苦しめて、世人の矚目する所となつた。校合雜記の傳ふる所の如き、これを事實とすれば、江戸つ子の典型、男の中の男として、今尚ほ、東京人の敬慕を受けてゐる幡隨院長兵衛なども、存外、下らぬ代物であつたのである。

一日、長兵衛が、或る風呂屋の二階で、したいか、酒に酔ひ、酔ひに乗じて、咆哮し、怒罵し、ひどく、亭主を困らしてゐると、旗下の士太田太良左衛門が、偶然、その前を通りかゝつた。太田は、強力を以て聞えた人である。時々、この

風呂屋へ遊びに来て、亭主は、久しく、その恩顧を受けてゐた。今、太田の姿を見ると、走り出て、袂を捉へ、

『只今、長兵衛が参つてをります。これこれで……』と、具さに、その亡狀を訴へ、長兵衛の杖を見せた。鐵棒入りの竹杖である。

太田は、頷いて、

『然し、身共が叱つて、合點するか知らず？』と、いひながら、長兵衛の竹杖を取つて、地を撃つこと、三四回に及んだ。竹は、さいらの如くに碎けて、中から、鐵棒が現はれた。

太田は、その鐵棒を提げて、二階へ押し上り、今しも、傍若無人に罵り立てゝゐる長兵衛の前に突つ立ち、睨一睨、

『こりや、長兵衛とやら、靜かにせぬか。身共、太田太良左衛門といふ者ぢや。こんな杖が、何になるか。』といふと、飴の如くに、捻ぢ曲け、押し搥めて、繩の如くにし、長兵衛の前へ投げ出した。長兵衛は、氣勢を吞まれて、酔ひも醒め果て、脱兎の勢ひはどこへやら、處女の如くに逃げ出した限り、復と、この風呂屋

に遊ばなかつた、といふのである。

この話、多少のおまけはあらう。以て、彼の徒の行跡を彷彿するには足る。

彼の徒が、然諾を重んじた、といふに就いても、大に議すべきものがある。一諾を千金よりも重しとし、一旦、よしと引き受けたことは、どこどこ迄も、命にかけても、これを實行して避けなかつた所は、一應、信義に厚かつたのである。稱すべきに似てゐるが、悲しいかな、彼の徒の信は、小信であつた。聖人の道を距る、甚はだ近くなかつた。

といふのが、孔子の語に、「君子は、貞にして、諒ならず。」と見え、又た、管仲を評した中にも、

豈に、匹夫、匹婦の、諒を爲すや、自ら、溝瀆に經れて、これを知ること莫

きが若くならんや。

の一句がある。「貞」は、貞操、貞節などと熟し、心を變へないことである。

信と見てよい。「諒」も、信である。たゞ、それは、小信である。

即ち、然諾を重んじ、信義を貴ぶの言に拘泥して、最初、引き受けた所、約

束した事が、後ち、非理であり、非道であることが發見されても、構はずに仕果す。悪い事と氣がついても、

『この期に及んで、何う、約束が違へられるものか、男子の面目に關する。』とばかり、無反省にやつて退ける。所謂、非を遂げる、といふもので、君子のしない所であるが、匹夫、匹婦の信は、大概、これである。これを稱して諒といふ。小信の意である。

男伊達の徒の信は、殆んど、この小信、この諒であつた。事の是非、善惡を問はずして、弱者の頼みを容れ、若しくは、承諾の後ち、それと氣がついても、必らず、遂行して忌まなかつた。無智、無學の彼の徒として、蓋し、已むを得ないことながら、識者は取らない。たゞ、今の輕薄漢が、利害次第、損得次第、弊履の如くに約束を棄て、以て、普通の事として、恥ぢないのに比すれば、優ること萬々であらう。

一の六 坂田藤十郎の潤達不拘

◇心より、我れと我が身を、縛り繩、切つて落せば、大自在なり。「愚佛」

元祿の頃、東の初代市川團十郎に對して、西に、坂田藤十郎があり、相對して、名優の名が高かつた。

或る日の事、藤十郎が、一座の女形二三人と、供を連れ、江州石山へ遊びに行き、酒を飲んでゐると、つひ向ふに、武門の歴々と覺しき人が、近習その他を併せて、上下十二三人、これも、酒宴を催してゐたが、聲をかけて、

「藤十郎ではないか。酒一つ、振舞ひたい。」といふ。藤十郎は、直ぐ、それへ出て、種々、話などを申し上げ、時を移して、日も、西に傾いた頃、辭して、自席へ戻つた。

すると、若侍が来て、

「何なりと、所望があらば、申すやう。」と傳へた。

「何も、所望とはござりませぬ。宜しく仰しやつて下さい。」淡泊に答へると、

「否、それでは、却つて、御機嫌が悪い。是非、何なりと……」と、強つての言葉に、

「それならば、お幕の側の松の樹を拜領致したうござります。」と答へ、その儘、駕籠を促して、山を下つた。

程経つて、一日、邸の前に、大勢の人聲がする。不審に思つてゐると、人足の采領が入つて来て、

「何時ぞや、石山で約束した松の樹、只今、贈り遣はす。」との口上である。藤十郎は、思ひ出して、

「成程、大身の方とは見受けたが、あの大木を、而も、一山への手續を濟せて、贈り越されとは……」と、少からず感心し、厚く禮を述べて、采領を返した。

さて、邸内へ運び込まうとすると、塀に問へて、路次口へ入らない。一同、困り果て、がやがや、騒いでゐると、藤十郎が聞きつけて、

「さてさて、埒もないことぢや。塀を壊せばよいではないか。跡は、塗つて置けば済む。」と、差圖した。

「合した金子吉右衛門といふ役者は、
「上手の名を得た人の心は、格別ぢや。」と、つくづくと感心した。

「塀を壊せばよい。」——成程、それに相違はない。塀に拘泥しなければ、何んな大木でも、自由自在に持ち込まれるが、一寸、気がつかぬ。塀に拘泥し、遮ぎられて、動きが取れず、たゞ、がやがやと騒ぐ者、十人が九人迄、それである。然し、拘泥は、宜しくない。人が、或る事、或る物に拘泥するのは、その事、その物に束縛されるのである。従つて、自由が利かないといふことになる。財産に拘泥する者は、大火事に襲はれても、その財産を打ち捨て、自由に逃けることが出来ず、或ひは、一命を棒に振る。地位に拘泥する者は、上官から不法を加へられても、自由に抗争することが出来ず、
長い物には巻かれよ。

とばかり、意氣地なく、口を噤んでゐなければならぬ。名譽に拘泥する者は、自ら信ずる所があつても、人の言葉や思惑に遮ぎられて、自由に意見を吐くことが出来ず、心ならずも、所信を曲げ、主張を捨てる。

何故、拘泥するか。慾の爲めである。いはんと欲する所をいひ得る獨立不羈、爲さんと欲する所を爲し得る潤達不拘は、たゞ、これ、無慾の人のものである。例へば、命も要らない、名も要らない、金も、官位も要らないとした、西郷南洲の如くであればよい。

但し、無慾とは、現に有する所の金や名譽を、強ひて捨て去る意味ではない。それ等に拘泥しなければよい。金を持ちながら、金に拘泥しない。名譽を有しながら、名譽に拘泥しない。これが無慾である。故に曰く、人間、無慾であれば、又た、拘泥することもない。

拘泥——佛教では、執着といひ、執着を離れることを、解脱といふ。解脱を得るに、道がある。解脱道論に、
戒と定と慧とを、解脱の道といふ。戒とは、威儀の義なり。定とは、亂れざ

るの義なり。慧とは、知り覺るの義なり。解脱は、束縛を離るゝ義なり。解脱は、無慾である。解脱の道は、無慾の道である。人間、須らく、戒律を保ち、禪定を修め、般若の智慧、以て、宇宙の實相、人生の眞意を明かにして、無慾の人となり、濶達不拘、自由自在の生活を送るべく修養しなければならぬ。ここにこそ、眞の生活がある。

一の七 舌の乾物

◇論篤、これ與せば、君子者か、色莊者か。「孔子」

彼の極樂參りをした男、耳の乾物の謂れを聞いて、ぞつとしながら、今一つの堂へ廻ると、そこにも棚があつて、仰山な餅仔が積まれてある。

「はてな、佛様がたは、あんな腥さものを食るのか知ら？」と、不思議に思ひながら、

「もしもし、觀音様、夥だしい餅仔は、何になさるのでせう？ 極樂には、不似

合なものぢやございせんか。」といふと、

「滅相な！ 極樂に餅仔があつてなるものか。」と、觀音様は、お叱りになつて、

「あれは、舌が、佛になつたのぢや。」

「何うしたわけでせう？」

「畢竟、娑婆に在つて、釋迦も、孔子も、そつち退け、聖人のやうな顔をして、人間は、心が大切ぢやの、仁義が何うで、忠孝が斯うぢやのと、偉さうなことをいふ癖に、その身の行ひは、嘘と胡麻化して世を渡るといふ、そんな奴が死ぬと、體は、地極の釜へ眞つ倒さま、未來永劫、浮ばれないで、舌だけが、極樂へ来る。あれは、舌の乾物ぢや。」

「論篤、これ與せば、君子者か、色莊者か。」——論の篤實な者、必らずしも、篤實な人ではない。或ひは、口先ばかり、見かけばかりの似而非君子、所謂、色莊者であるかも知れぬ。七子の五つ紋に仙臺平の袴、利巧さうな口を利用して、見

かけは、如何にも莊重らしいが、内實のこれに伴はない偽りもの、これを稱して色莊者といふ。

こんなのが死ぬと、舌だけが、極樂へ行く。舌の乾物は、耳の乾物よりも困る。極樂も、嘸、騒々しいことであらう。

一の八 井上毅の家憲九則

◇ 汎く交る勿れ。「井上毅」

- 一、早く起きて、門戸を開き、室の内外を掃へ。
- 一、食は、必ず、同時に案に就け。偃臥する勿れ。高く、歌謡を吟する勿れ。
- 一、賓客を待つ、必ず、恭敬なるべし。
- 一、夜は、九時を過ぐれば、燈を滅し、寢に就け。閑話を講じて、人の眠を妨

ぐる勿れ。

- 一、汎く交る勿れ。
- 一、有無、相通するを要せず。
- 一、病を忍んで、告げざる勿れ。
- 一、言語は、鄙俗を遠けよ。
- 一、衣禪は、淨潔なるべし。自ら浣ひて、他人を勞せざれ。「井上毅」

九則、すべて、卑近の言ながら、又た、味はふべきものがある。殊に、謹嚴方正であつた言者の爲人を想望し來れば、何れか、これ、後人の金科玉條ならざる？ 取つて以て、我々の家憲に充て、修養訓に供すること、可である。

取り別け「汎く交る勿れ。」の一個條に於て、吾等は、多大の感慨がある。今の人、餘りに、廣く交はり過ぎる。甚だしきは、交友の多いことを名譽とし、最も悦んで、權門、富貴の人と交はり、以て、見榮とする。その交情の深からずして、永續し得ないこと、怪しむに足らぬ。

古人はいつた、

君子は、先づ擇びて、後に交はる。小人は、先づ交はりて、後に擇ぶ。故に、君子は、咎め寡く、小人は、怨み多し。

と。この語、今の人を戒しめるに足る。今の人、廣く何人とも交はるのは、擇んで交はらないからである。こゝに於てか、後悔、これに従ひ、

『いや、存外な男だつた。』などの不平が起り、怨言が出る。

尙ほ且つ、怨言も出ず、不平も起らないならば、それは、爲めにする所があつて、忍ぶのである。利害を計つて、打算的に交はるのである。

交情の深きを得ないのも、當然の結果である。廣ければ深く、狭ければ浅いのは、學問、然り、情誼、然りである。例へば、遊女に實がないのと一般である。

今の交はる人の心は、殆んど遊女の心である。今の交友は、遊女的交友である。自然、永續しない。張謂の詩に、

世人結交須黃金 黃金不多交不深。

縱令然諾暫相許。終是悠々行路心。

(世人、交はりを結ぶに、黄金を須ゆ。黄金多からざれば、交り、深からず。縱令、然諾、暫く相許すも、終に、是れ、悠々たる行路の心。)とある如く、金の切れ目が、縁の切れ目となるのは、必定である。

一の九 北條泰時の無慾

◇欲しや惜し、憎や可愛と、思はねば、今は世界が、まるで我がもの。「古歌」

北條泰時は、北條九代の中に在つて、その人物が、最も、卓出してゐたといはれる。

承久の亂に、京都へ攻め上つた序で、泰時は、樺尾の明慧上人に逢つて、

「某事、不肖の身を以て、重任に當り、群下に臨み、日夜、苦心仕る。何とて、衆を治め、争ひを歇めることが出来ませうや。」と問うた。明慧は、たゞ一言、

「無慾になり給へ。」と教へた。泰時は、重ねて、

「某一人、無慾になればとて、群下が、無慾にならずば、詮のないこととござりませう。如何？」と問うた。明慧は、

「否、下に目をつけるに及ばぬ。卿だけ、先づ、無慾になり給へ。」と繰返した。

左右する中、父義時が死ぬと、泰時は、その跡を襲いで、執權となつた。さて、弟たちに、所領、財寶を分けるのに、その大部分を分け與へ、自分は、かつに足るだけを取つた。

二位の尼は、泰時の伯母に當る。それを聞いて、

「卿の取分は、餘りに少いではないか。」と注意した。泰時は、夷然として、

「某は、家督を受けましたこと故、何の乏しいこともござりませぬ。たゞ、弟たちの豊かなやうと、そればかりを思つてをりまする。」と答へた。この言葉に、尼は、思はず、感涙を催した。

果然、年を逐うて、親族、敬ひ慎しみ、鎌倉の武士は、何れも、泰時に心服した。

X X X

誠は、力である。以て、人を服せしむるに足る。誠を以てして、尙ほ且つ、人が服しないのは、その誠が、眞の誠でないからである。

眞の誠でないとは、如何？

誠は、至情である。名を求めざる爲めでもない。利を慮かる爲めでもない。一片の至情、已むに已まれずして、行爲に發するもの、これ、誠である。

従つて、誠は、無我、無慾を豫想する。我れのある者は、名を求める。慾のある者は、利を慮かる。そのいひ、その行ふ所、幾分、打算的となるを免れぬ。甚だしければ、虚偽に墮する。號して誠といふと雖も、到底、眞の誠ではない。

その、人を動かす、人を服せしむるに足りないのは、無論の話である。

明慧上人は、北條泰時に示すに、無慾の二字を以てした。畢竟、誠を以てしたのである。泰時は、能く、無慾を實行した。取りも直さず、誠を以て、親族に對し、臣下を過したのである。彼等が、泰時に悦服したもの、不思議ではない。

一〇〇 乞食八兵衛の事

◇求めなきは、これ至貴。足るを知るは、これ至富。心を安んずるは、これ至樂。「安藤省庵」

享保某の年、押し詰つた十二月十七日、江戸室町越後屋吉兵衛の手代市十郎といふが、用達しに出た途中、金三十兩入りの袋を落した。その頃の三十兩は、かなりの大金である。殊に、主人の金とて、青くなつてしまひ、所詮、ないものと思ひながら、元と来た道を取つて返し、尋ね尋ねする程に、一人の乞食がゐて、「何をお尋ねです？ 若しや、金ではありませんか。」といふ。市十郎は、嬉れしさいふばかりなく、ありの儘を話すと、「然うですか。その金は、手前が拾つて置きました。多分、落し主が、尋ねて来られるだらうと、最前から、こゝに待つてをりますので、貴方に相違なければ、

直ぐ、お渡し申します。」との言葉に、市十郎は、金額、一緒に入つた證文などのことを、一々、いひ聞かせた。乞食は、頷いて、「では……」と、金を懐ろから取り出して、袋の儘、市十郎に渡した。市十郎は、餘りの事に、且つ驚き、且つ喜び、その儘には濟し難くて、内、五兩を取つて、

「切めて、これだけでも、お前の得分にして貰はう。」と、差し出した。乞食は、かぶりを掉つて、

「否、頂くわけはありません。」といつて、受けやうとしない。

「この金は、最早、ないものと思つてゐたのに、お前の志で、再び、私の手へ戻つた。残らず、自分のものにするわけには行かない。少いけれど、是非、取つてくれ。」市十郎が、強つていふと、乞食は、言葉を改めて、

「よく考へて御覧なさい。その五兩を貰ふ心なら、最初から、三十兩を返しません。慾で拾つて置いたのぢやない。何ういふ人が落したのか。主人の金でもあつたら、嘸、難儀をされやう。他人に拾はせたら、落し主には返るまいから、と然

う思つて、拾つて置いたのです。今、貴方へお返しすれば、私の志通りになつたわけ、では、お暇致します。」とばかり、そこを去つて、見返りもせぬ。

市十郎は、跡を追つて、取り敢へず、

「今日は、寒さも強い。歸られたら、酒でも飲んで下さい。ほんの寸志だ。」と、改めて、若干の小錢を贈つた。乞食は、

「これは、お志ですから、頂きませう。」と、快く受けた。名を尋ねると、車善七の手につく、八兵衛といふ者とのことであつた。

市十郎は、店へ歸つて、この由、主人吉兵衛に話した。吉兵衛は、感涙を催して、

「何卒、その五兩を八兵衛にやりたい。明日、善七の家迄、持つて行つて、善七にもいひ聞かせ、八兵衛に合點させて、左に右、受け取るやうにするかい。」と翌早朝、市十郎に手代頭を添へて、善七の許へやつた。

所が意外、善七の言葉に、

「その八兵衛は、昨夜、どこかで、金を貰つて來たといつて、私にも見せました

が、それから、仲間の乞食共を呼び集め、酒、肴を調へて、人にも食べさせ、自分も、食べました。何分、食べつけないものを食べ過ぎて、食傷でも起しをつたか、今朝、夜明け頃、急に、死にました。」とある。

市十郎は、大に驚き、死骸を見届けた上、善七には、

「何卒、この死骸を貰ひたい。粗末に、外へやらないやうに頼む。」といひ合せ、歸つて、吉兵衛に話した。吉兵衛は、早速、人をやつて、八兵衛の死骸を引き取り、彼の五兩の金で、手厚く、本所の無縁寺——回向院——へ葬つた。

世には、金を持つた貧乏人がある。更に甚だしく、錦を着た乞食がある。西人の語に、

貪慾漢の咽喉に向つて、溶金の大洋を注け。彼れは、尙ほ、いふであらう、與へよ、與へよと。

と。絶えず、不満を感じ、不足に苦しむ貪慾漢の心持ちたる、到底、乞食の境界である。

貧困は、多くのものを缺く。そして、貪慾は、すべてのものを缺く。

とは、パブリアス、サイラスの語、

多くを貪る人は、多くを缺く。

とは、ホレースの語、

貪慾は、一切を得やうとして、一切を失ふ。

とは、ラ、フオンテーヌの語、皆、味ふに足る。貪慾漢、或ひは、錦を着るであらう。その心持ちに至つては、全く、これ、乞食である。

金を持った貧乏人のある如く、金を持たない富者もある。錦を着た乞食のある如く、菰を被つた金持ちもある。シェイクスピアは、

貧にして安んずる人は、富むのである。全く、富むのである。

といひ、ソロンは、

何ものをも望まない人は、眞に富んでゐる。

といひ、ゴールドスミスは、

富は、財を知らないのを最上とする。

といつてゐる。貧といひ、富といふ。心に在つて、物にはない。足ることを知り、貧に安んずる者の心境は、縦し、身には襤褸を纏ひ、菰を被らうとも、その樂しむ所を失はぬ。例へば、顔回の如くである。論語に、

賢なるかな、回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は、その憂ひに堪へず。回や、その樂みを改めず。賢なるかな、回や。

と見えてゐる。これを稱して、金を持たない富者、菰を被つた金持ちといふ、亦た、可であらう。

因つて想ふに、話の乞食八兵衛は、その實、乞食ではなくて、菰を被つた金持ちであつたのである。落し主の市十郎以上、或ひは、越後屋以上の金持ちであつたかも知れぬ。

さばれ、世人滔々、富貴を物に求めることを知つて、心に求めることを知らぬ。心に求めるとは、足ることを知るのである。求めなきの、至貴たり、足るを知るの、至富たり、心を安んずるの、至樂たるを知るのである。

破れたる、衣を着ても、足ることを、知ればつゞれの、錦なりけり。

知足の二字、最も、我々の修養の標的でなければならぬ。

一の一 蜜蜂の針

◇人を誑へば、穴二つ。「日本俚諺」

或る時、蜜蜂が、神様へ蜜の壺を献上した。神様は、大層のお喜びで、「奇特に思ふ。この褒美には、何なりと、遠慮なく申し出よ。汝の願ひを叶へて遣はす」との仰せ。蜜蜂は、あれかこれかと考へた末に、「一刺し刺せば、どんなものでも、死んでしまふやうな、鋭い針をお授け下さいまし。」とお願ひした。神様は、この無理な願ひに、且つ驚き、且つ、悪感を催しながらも、一旦、約束した以上、取り消すわけには行かぬ。大に迷惑がりつ、「では、然うした針を遣はさう。けれど、蜜蜂よ、その針で人間などを刺すと、針は、忽ち、抜けてしまつて、お前も、命を失ふぞよ。その心得で使ふがよい。」

と注意された。蜜蜂が、現に持つてゐる針は、即ち、それである。

天に向つて唾する者は、自ら、その唾を浴びる。壁へと強く打ちつけた鞠は、後ち、自分の手へ戻る。他人を害して、その儘、無事に済むと思ふ者があるならば、その考へたる、横着に過ぎる。事實は、他人を害するの、畢竟、自ら害するに外ならぬことを示すである。これ、天命である、自然の理である。

人を誑れ。誑られる者にも口がある。譏り返すに相違はない。これ、自ら誑るに外ならぬ。

人を打て。打たれる者にも手がある。打ち返すは、必定である。これ、自分を打つのである。

人を欺け。欺かれた者、黙して止まず、酬ゆるに不信用を以てすれば、欺く者の受ける損害は、欺かれる者のそれに比して、大小、如何？ 亦た、自ら欺くに等しい。

金を得るには、種々の手段がある。働くこと、これ一つ。借りること、これ一

つ。そして、盗むこと、又た一つ。働く者は、心身を苦しめなければならぬ。借りた金は、返さなければならぬ。夜中、人の寝込みを襲つて、財物を掠め去るといふ方法は、最も賢明に似てゐるが、

天網恢々、疎にして漏らさず。「老子」

忽ち、警察の網にかつて、刑務所に送られ、赤いものを着て足らず、その時限り、社会的に自殺しなければならぬ。これ、賢明か。これ、不賢明の極ではないか。

盗人は、甚はだしい。高利貸は、如何？ 暴利商人は、如何？ 悪徳家主は、如何？

その、人を害するの度は、往々、盗人の上に在つて、人に怨まれ、悪まれるの度も、往々、盗人の上に在る。

他人を害するの、やがて、自ら害するに歸するは、天理の免れない所である。

因果應報は、屈撓し得ない自然の鐵則である。決して、佛者の勸善懲惡手段たるに止まるものではない。「人を誣へば、穴二つ。」——事實の示す所、常に、斯くの如くである。

人を誣ふことが、自ら誣ふこと歸するならば、人を祝することは、自ら祝すること歸するであらう。人を害することが、自ら害することに外ならぬならば、人を益することは、自ら益することに外ならぬであらう。人、常にいふ、「自分の爲め」と、眞に、自分の爲めに計る者は、宜しく、他人の爲めに計るべきである。

一〇三 白河樂翁の風流箴

◇きゆるときをゆるして、雪を見、しづくの月をおもひて、夕立にあふべし。

「松平定信」

- 一、夜ふけて事とふとも、初ほとゝぎす、雁がねは、必ず、疎くすべからず。
- 一、枕に通ふとも、とがなきものは、花の香。遠寺の鐘、霜夜の虫の音は、殊にあはれむべし。

一、にくゝとも、ゆるすべき者は、花の風、月の雲。いつけにあらそふ人は、ゆるすのみかは。

一、野分のあしたの庭の面ならで、亂るゝをゆるすはあらざるべし。落花の狼藉は、ゆるすのみかは。酒のみだれは、そのたぐひならず。

一、月は、いつとても、親しむべし。されど、過ぎし世を慕ふもくるしく、行末を思ふも憂し。唯、むかひてこそあらまほしけれ……

一、有るもなきにおとるものは、誠なき人の才、をんなのさえ、稻妻のかけ、逢ふと見し夢。

一、うたてき物は、みなづきの鶯、落葉の風にさわぎたる。

一、おほきをいむ物は、茶器、酒の肴、おそ櫻、りうたんの花、ほとゝぎす、鈴むし。

一、埋もれてをかしきものはあらず。されど、子の日の小松の、夏草にかくれたるのみこそ。

一、おもふにたがひて、うれしき物は、さみだれの雲間の月、葉つき十五夜の

晴れたる、人の子の、いとけなきとおもふが、いつか、ふみ作り、歌よみたる。

一、うとむべきものは、歎きいふ人、よそ見ぬりくつ、午祭の鼓のおと、蜘蛛のる、あしだの迹、すゞめ、ねこ、ねすみ。猶にくむべく、打ちもころしつべくおもふは、蠅、蚊。晝出づるは、殊にこそ。

一、たふとぶべきものは、人にことなる人。たふとむまじきものは、人に異なるさまの人。

一、きゆるときをゆるして、雪を見、しづくの月を思ひて、夕立にあふべし。

一、梅が香を、櫻の花、柳の枝になどゝは、おもふまじき事なり。花のくれなる、柳の緑、心をわけて楽しむべし。

一、たれりと思ふべきは、わが身。足らずとしてよき物は、つとむべき道。

一、樂敷とおもふが、樂しきの本なり。いかで、外に求むべきと、たのしむおきなふとぞ。「松平定信」

奥州白河の城主松平定信は、天明七年、入りて老中に任ぜられ、幼主家齊を

佐けて、寛政の改革を行ひ、治績の見るべきものがあつたが、寛政七年、致仕の後、樂翁と號し、花鳥風月を友に、詩を詠じ、歌を讀み、或ひは、著述などをして、悠々たる閑日月を樂しんだ。前の政治家、後の風流人——所謂、英雄、頭を回らせば、則ち神仙。

なるものであらう。文政十二年棄世。壽七十二といふ。

樂翁公定信の風流は、殆んど、その至るべきに到つてゐた。世に、風流がり屋は多い。形を風流にして、心を俗にする似而非ものは多い。風流の眞諦を解する定信の如きは、古今希有といつてよい。壁書一篇、その心境が思ひやられる。殊に、「月は、いつとでも、親しむべし。されど、過ぎし世を慕ふも苦し。行末を思ふも憂し。唯、むかひてこそあらまほしけれ。」といひ、「うとむべきものは、歎きいふ人、よそ見ぬりくつ。」といひ、「きゆるときをゆるして、雪を見、しづくの月をおもひて、夕立にあふべし。」といひ、「梅が香を、櫻の花、柳の枝になど、は、おもふまじき事なり。花のくれなる、柳の緑、心をわけて樂しむべし。」といひ、「樂敷とおもふが、樂しきの本なり。いかで、外に求むべき。」とい

ふが如き、まことに、哲人の言である。その超悟の心持ちたる、他人の及ぶ所ではない。

月を見て、過去を慕ふのは、執着の爲である。未來を思ふのは、取越苦勞である。共に、佛教謂ふ所の妄念なるもの、地獄の種である。「唯、むかひてこそあらまほしけれ。」——これを無心といふ。心がないのではない。過去にも、未來にも、留まる心がないのである。

雪は、消えるものである。夕立の後には、雫の月がある。無常の世である。無常の世を、無常の世と知つて、無常に順應し、敢へて、無常に逆ふことがなければ、無常も、これ、常住である。消える雪も、惜しくはない。夕立も、疎むに足らぬ。

古歌に、

梅が香を、櫻の花に、匂はせて、柳の枝に、咲かせてしがな。

これ、俗人の情である。物をして、人をして、その在る如くに在るを許さず、強ひて、我が意の如くに在らしめんとするもの、有我、我執、我意、我見の甚は

だしいものである。熊澤蕃山はいつた、

小人は、己れを以て、物を見る。

と。これである。又たいつた、

智者は、物を以て、物を見る。

と。これではなければならぬ。梅は梅、櫻は櫻、柳は柳、それぞれ、その特色を存して、皆、楽しむに足る。十人十色、人さまざまの世の中ながら、亦た、それぞれの個性を持つてゐる。自分に似ないことを理由として、妄りに他人を譏り、嘲り、貶し、罵るのは、到底、君子の事ではない。

苦樂は、一心に在る。世に、楽しい心はあるが、楽しい物はない。苦しい心はあるが、苦しい事はない。

一心次第、天堂も、地獄となり、將た、地獄も、天堂となる。

とは、ミルトンの語である。何事も、心一つの世の中である。貧富といふも、心一つに在る。貴賤といふも、心一つに在る。身外に向つて神仙を索めるのは、畢竟、徒勞でなければならぬ。

一の二三 木下藤吉郎の望み

◇急がずに、休まずに。「英國俚諺」

岐阜での一日、織田家の士等は、互ひに、將來の望みを語り合つた。何れも、年少血氣の勇士等として、負けず劣らず、驚天動地的の大望を述べた中に、木下藤吉郎は、

「自分は、千辛萬苦の末に、漸く、今の三百石にありついた。この上、三百石も得たいと思つてをる。」斯ういふと、一同は、その望みの小さいことを冷笑した。けれど、藤吉郎は、夷然として、

「否！」と、かぶりを掉り、

「出来ぬことを望むのは、痴人の夢ぢや。自分が、切めて六百石をといふのは、恐らく、不可能のことではない。自分は、たゞ、出来ることを望むのぢや。」と應

じた。

藤吉郎が、後の豊臣秀吉であることは、誰れも、知つてゐる。

孫思邈はいつた、

心は、小ならんことを欲し、志は、大ならんことを欲し、知は、圓ならんことを欲し、行は、方ならんことを欲す。

と。「志は、大ならんことを欲す。」——まことに、その通りで、志の小さい者に、大事の成つた例はない。人間、須からく、

舜、何人そや。予、何人ぞや。

といった顔回の如き、

彼れも、丈夫なり。我れも、丈夫なり。吾れ、何ぞ、彼れを畏れんや。

といった成觀の如き、

彼れも、人なり。予れも、人なり。

といった韓退子の如き志があるべきである。

が、大事業は、單に、志の大なることに依つて成るのではない。それに伴ふ所の實力がなくてはならぬ。努力がなくてはならぬ。大志に相應する實力がなければ、努力があつて、事は、初めて、成就する。

然るに、青年血氣の輩は、古人の功業の偉大なこと、事蹟等華々しいことを羨望するの餘り、たゞたゞ、英雄たり、豪傑たらんことを望んで、己れの實力が、英雄たるに堪へるか、己れの努力が、豪傑たるに充分であるかに就ては、一向、顧慮する所がない。

従つて、修養もせぬ。知識、才能を磨かうともせぬ。

斯くして、古人に倣はうとするのは、孟子の所謂、

木に縁りて、魚を求む。

の類である。

『今に見ろ、俺だつて……』と力み返つた所で、何になるものではない。寧ろ、實力相應の志を立て、それに向つて、「急がずに、休まずに。」歩一歩、向上の道を辿るに如かぬ。

一の四 石谷貞清の苦言

◇ある程の、伊達仕盡して、紙子かな。「園女」

井伊直孝は、奢侈を惡み、儉約を重んじた人である。尙ほ且つ、奢侈の理由によつて、大に、江戸町奉行石谷貞清に凹まされたといふ。

三代將軍家光の時、直孝は、大老の職に在つた。或る日、夕飯を食つてゐる所へ、石谷が訪ねて來た。直孝の膳には、母からの到來物、小鯛の鹽焼きが載つてゐた。豫ねて、石谷の性格を知つてゐた直孝は、急ぎ、それを膳の下へ隠して、

「何卒、此方へ！」と案内させた。

所が、石谷は、つくづく、膳の邊りを見て、苦り切つて、

「御大老には、白米の飯をお食りでござるか。近來、士民共に、大分、奢つて參つたが、御大老からがこれでは、何程、禁じて、効果のあるわけはござらぬ。

さてさて、嘆かほしいこととござる。」と、溜息を吐いた。直孝は、赤面して、飯も喉へ通らなかつたとか。

當時は、身分の上下を問はず、玄米に味噌汁位を食つてゐたのである。

奢りは、單に、奢りとして、戒しむべきのみではない。奢りの裡、又た、種々の不徳、種々の不幸が潜在するのである。

奢りは、必然、財政の逼迫を致す。逼迫といはない迄も、それだけ、手元を詰めるの結果になることは、理の見易き所である。斯くて、親、兄弟が、病氣に罹つても、親類、縁者が、火事に出遇つても、朋友、知人が、商賣に失敗しても、手を下して、自由にこれを救ふことが出來ぬ。心ならずも、傍觀して止み、不義理、不人情を忍ばなければならぬ。我が口腹の慾の爲めに、人間當然の義務を行ひ得ないこと、思へば、淺猿しさの極みである。

そのみではない。諺に、
貧の盗み。

といふが、その貧の因る所は、大部分、奢りに在る。

奢りには、傲慢が、附きものである。

又た、奢りは、人の忍耐力を弱め去る。平生、奢りを事とし、美衣、美食に慣れた者は、一朝、不幸に會しても、粗末なものには堪へ切れぬ。已むなく堪へるその苦痛は、傍の見る眼も哀れである。而も、奢りに由來する不徳、不幸は、尙ほ他にも、多々あることを記せなければならぬ。

幕府の老を以てして、小鯛の鹽焼きを憚り、白米の飯を咎められる——當時の質素が想ひやられる。尤も、奢りを極めた今日の人も、過般の大震大火には、大分、玄米を食はされたが……

一の一五 愛の神の失策

◇油断より、小事大事に、なるものぞ。たゞ何事も、厚く慎しめ。「古歌」

夏の暑さに、愛の神は、すつかり、遊び草疲れてしまひ、一と寝入りして目を覺すと、さあ大變、矢筒がひつくり返つて、自分の矢が、傍の死神の矢とごつちやになつてゐる。精々、擇り別けたが、数が足りない。仕方がないからと、死神の矢の幾本かを取つて、自分の矢筒へ入れた。

すると、この事が、直ちに、人間界に影響して、容易に死にさうもない若者の胸へ死の矢が立つて、ほつくり、死んでしまひ、親や女房を悲しませたり、六十七十になつて、何の役にも立たない老人の胸へ、愛の矢が中つて、妾を圍ひ、藝者狂ひをして、世間の物笑ひになつたりの、不思議な現象が見え出した。

因はといへば、愛の神が、晝寢をして、矢筒を倒し、矢を取り違へたに在る。その事が、直ちに、人間界に影響して、種々の悲しむべき出来事を現出するに至つたとすれば、うつかりとは、晝寢も出来ない。

眞實、うつかりとは、晝寢も出来ない。大事は、常に、小事から起る。小事、必らずしも、小事ではない。その、却つて、大事たるの往々である。

然るに、多くの人が、小事の小事たるを知つて、その、大事たるを知らず、これを馬鹿にしてかゝる所から、つひ、大事を惹き起す。小事の、やがて、大事たるを知る者は、小事と雖も、油断はせぬ。寧ろ、小事に於て、最も、戒心する。大事に臨んで、恐れ慎しむことは、出来易いが、小事を見ては、左右、これを侮つてかゝるのが、先見の明を缺く、人間の常例であるからである。

一の一六 吉田兼行名利の誡め

◇嘆息す、人間萬事非なるを。「杜子美」

名利に使はれて、静かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ。財多ければ、身を守るに貧し。害ひを買ひ、累ひを招く媒介なり。身の後ろには、金をして北斗を拄ふとも、人の爲めにぞ、煩はるべき。愚かなる人の、目を喜ばしむるの樂み、亦た、味氣なし。大なる車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心

あらん人は、うたて、愚かなり、とぞ見るべき。金は、山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。

埋もれぬ名を、永き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚かに拙き人も、家に生れ、時に會へば、高位に昇り、驕りを極むるもあり。いみじかりし、賢人、聖人、自ら、いやしき位に居り、時に會はずして止みぬる、又た多し。偏へに、高き官、位を望むも、次に愚かなり。

智慧と心とこそ、世にすぐれたる譽れも残さまほしきを、熟々思へば、譽れを愛するは、人の聞を喜ぶなり。褒むる人、貶る人、共に、世に留らず。傳へ聞かんと、亦々、速かに去るべし。誰れをか恥ぢ、誰れにか知られん事を願はんや。譽れは、亦た、毀りの本なり。身の後の名残りて、更に益なし。之れを願ふも、次に愚かなり。

但し、強びて、智を求め、賢を願ふ人の爲めに言はゞ、智恵出で、は、偽りあり。才能は、煩惱の増長せるなり。

傳へて聞き、學びて知るは、眞の智に非ず。如何なるをか智といふべき。可、不可は、一條なり。如何なるをか善といふべき。眞の人は、智も無く、徳も無く、功も無く、名も無し。誰れか知り、誰れか傳へん。これ、徳を隠し、愚を守るに非ず。本より、賢愚、得失の境に居らざればなり。迷ひの心を持ちて、名利の要を求むるに、斯くの如し。萬事は、皆、非なり。言ふに足らず、願ふに足らず。「徒然草」

人の欲する所二つ。曰く、名である。曰く、利である。世人の役々汲々たる所以、一として、この二つの爲めならぬはない。この二つ、果して、それ程の價ひを有するか。

この世は、無常の世である。無常とは、變化を意味する。譽れの毀りと變じ、利の害と化するの常なるを思へば、譽れを欲するのは、毀りを欲するのである。利を求めるとは、害を求めるとである。名利に何の價ひがあらう？ 却つて、これ、人間不幸の由來する所である。

變化するものは、名のみではない。利のみではない。この身からが、時々刻々に變化して、終には他界のものとなる。身後の名が、何になる？ 身後の利が、何になる？ 譽れを聞いて、喜ぶに由なく、富を擁して、樂しむに途がない。この身、空に歸して、名も、空に歸し、利も、空に歸する。萬事が、空に歸するとならば、何の爲めの苦勞であらう？

ここに於てか、名利の表に超然として、

蝸牛角上爭何事 石火光中寄此身

隨富隨貧且相樂 不開口笑是痴人。「白樂天」

(蝸牛角上、何事をか爭ふ。石火光中、此の身を寄す。隨富、隨貧、且らく相樂しむ。口を開いて笑はざるは、是れ痴人。)

萬事を一笑し去るのを、古來、達人の態度とする。

□虚言を、吐くべからず、正直に、考へ、眞實に話せ。

フランクリン

一の一七 毛谷主水軍情に通す

◇人多き、人の中にも、人ぞなき。人となれ人、人と爲せ人。「古歌」

關ヶ原の役に、徳川方の諸將は、それぞれ、斥候の兵を出して、敵の勢力を探らせた。その復命は、何れも、八九萬、或ひは、十萬位るといふに一致したが、黒田長政の士毛谷主水のみは、

「一萬には過ぎますまい。」と、異な報告を齎らした。

長政は、斯くと、家康に報じた。家康は、主水を召し出して、

「敵は、餘程の大軍ぢや。一萬とは、怪しいぞ。」と詰つた。主水は、

「成程、七八萬はござりませう。けれど、その中、眞に闘志のある者と申せば、石田、小西などの、恃み切つた兵だけで、ざつと、一萬には過ぎませぬ。他の數萬人は一陣が破れれば、忽ち、逃げ散つてしまふといふ、烏合の衆でござります

る。」平然として、斯う答へた。

家康は、つくづく、感心して、

「主水は、敵の内通を受けてをるのか。善く、軍情を知つてをる。」と賞め、手づから、饅頭を取つて與へた。主水は、石壇に立ちながら、それを食つて、さて、辭し去つた。

X X X

西軍八九萬——事實は、四五萬位のものであつたかも知れぬが、これを東軍に比較して、幾分、優勢であつたには相違ない。尙ほ且つ、半日の戦ひに、脆くも一敗して、天下を徳川氏の手に渡すべくなつた所を見ると、戦ひの勝敗は、兵力の多少に決するよりも、士卒の素質に因る點が多い。毛谷主水の見通り、西軍の大部分は、心に兩端を挟む者ばかりで、眞に恃むべきは、僅々、一萬人にも足りなかつたのである。

今、關ヶ原の役の勝敗の跡を回想し、一轉、我が邦の現状を見る時、吾等は、そこに、甚はだ憂ふべきもののあることを發見する。六千萬人、人口は多い。所

謂る五大強國の一として、世界を横行闊歩するのに、何等、不足を感じないであらう。たゞ、國民の素質は如何？ 維新當時の日本には、犠牲的精神の權化ともいふべき志士仁人が、雲の如くに叢がり起つた。降つて、明治二十七八年の役の頃となつても、國を擧げて、殆んど、忠愛の化身であつた。今日は如何？ 今日如何？ 如何に眞面目に見ても、今日の日本人は、復た、當年の日本人ではない。國民の素質が、著るしく劣悪になつてゐる。三十年、五十年の以前の日本人に比すべき日本人が、今の六千萬人中、幾人あるか。毛谷主水の言に願ひて、吾等は、自ら赧然たると同時に、國家の前途に對して、深憂なきを得ぬ。

思へ、國利を措いて、黨利をこれ謀り、民福を忘れて、私福をこれ營む者、これ、今の政治家ではないか。利己一偏、拜金一偏、法の不備に乗じて、脱税を企て、眼中、國家なく、社會なく、他人の苦患を對岸の火災と見捨て、一身の榮華をこれ貪る者、これ、今の富貴者ではないか。學者と稱し、宗教家と號し、文士と已惚れ、教育者と高ぶる輩も、皆、これ、美名の下の醜奴ではないか。

一の一八 菰被りの名言

◇不義にして、富み且つ貴きは、我れに於て、浮雲の如し。「孔子」

加賀の野田山は、前田家代々の墓地である。家中の士も、多くは、この山の麓に葬るの例で、毎年の中元には、家々からの燈籠が、夥しく供へられ、見渡す限り、夏の夜の一美観であつた。

その際、厚祿の家では、假小屋を造り、番人をつけたが、一般には、然うは行かず、灯し捨てにして歸ると、その後へ悪黨共が來て、蠟燭を盗み去るといふ、忌むべく風があつた。

或る時、例の悪黨共が、片つ端から、燈籠を吹き消し、蠟燭を盗んでゐると、「おいおい。」と聲をかけたのは、傍に寝てゐた乞食體の男で、身には、菰を被つてゐる。

「人が、先祖の爲めにといつて、墓に供へた燈籠ぢやないか。それに、そんな狼藉する。善くないことぢや。止めさつしやれ、止めさつしやれ。」と制してかゝつた。悪黨共は、腹を立て、

「菰被りの身で、餘計なことをいふな。」と、口汚なく罵つた。けれど、乞食は、冷々然として、

「お前たちのやうな事をせぬから、菰を被るのぢや。」とやり返した。この一言には、流石の悪黨共も、多少、愧づる所があつたのか、その儘、こそこそと逃げ去つたとか。

「不義にして富み、且つ貴きは、我れに於て、浮雲の如し。」といつた孔子は、又

富と貴とは、これ、人の欲する所なり。その道を以てせざれば、これを得るも、處らざるなり。貧と賤とは、これ、人の惡む所なり。その道を以てせざれば、これを得るも、去らざるなり。

といつてゐる。而も、世に、不義ならぬ富貴があるであらうか。テレンスの曰くに、

致富の道、一ではない。而も、その十に七八は、恐らく、汝の屑よしとないで所あらう。

とあるもの、必らずしも、奇矯の言ではあるまい。世の富貴者の大部分は、曰く不正直、曰く吝嗇、曰く強慾、曰く不人情、曰く諂諛——これ等の不義を敢へてして、その富貴を贏ち得た者ばかりである。尙ほ且つ、傲然として人に驕り、人亦た、その前に叩頭することを辭しないのは、何故か。

畢竟、相率ゐて拜金主義者なる今の人は、人間の價値が、官爵や、持ち物の多少やに關はらないで、全く、人格の如何に定まることを知らないのである。人格を蔑如すること、今の日本人の如きはない。今の一切の腐敗が、こゝに原因することと思へば、「菰被りの名言」成程、傾聴さるべき名言でなければならぬ。

一の一九 掴んだら放さない

◇住む所、なきを心の、しるべにて、その品々に、任せぬる哉。「無難禪師」

婚禮の席で、酒嫌ひの老人が、手持ち無沙汰で、欠ばかりしてゐると、主人が、氣をつけて、金米糖の入つた、南京古染つけの壺を侷めて、

「一つ、召し食れ。」といふ。甘黨の老人、

「これは結構！」と、手を突つ込んで、掴み出さうとすると、手頭が詰つて、引つ張つても、こぢ廻しても、何としても、抜けないのである。

「さあ大騒ぎ！一同、酔ひも醒め果てた時、座中の一人が、

「何程、壺が大切でも、豈夫、お年寄の手を切るわけにも行くまい。」いふが否、烟管を振り上げ、はつしとばかり、打ち下した。壺は碎ける。座敷一面、金米糖の花が散る。

然し、老人は、助かつた。

「先づ安心！」と、皆なで、老人の手を見ると、これは、したり、手に一ぱい、金米糖を掴んでゐた。

何人も、物に執着することを免れない。金に執着し、家、屋敷、家財、諸道具に執着し、女に執着し、名譽に執着し、權勢に執着し、苟くも掴む所があれば、金輪際、手放すまいとする。

斯くて、その物が、束縛となり、人間、あたたら、物の奴隷となつて、自ら苦しめた揚句には、とい、命をさへ失ふとは、何と哀れなものではないか。先頃の大地震、大火にも、それが、大分あつたらしい。

といふのが、慾の爲めである。慾があるからこそ、物に執着し、束縛せられ、掴んだら放さない、とかゝるのであるが、如何せん、人間、慾のない者はない。又た、慾がなくて渡られる世の中ではない。汽車は、蒸氣によつて動き、人は、慾によつて動く。その事の善悪は、如何に在れ、實狀、正に斯くの如くである。

果して然らば、慾のあること、必らずしも、咎むべきではない。要は、慾を制するに在る。

どの程度に制するか。物に執着するに至らない迄に制する。一旦、攔む所があつても、時宜次第、惜しけもなく、手放してしまふといふ、程度に制する。經に曰く、

應無所住而生其心。

(應に、住まる所なくして、其の心を生ずべし。)

と。即ち、この意である。

無難禪師の歌は、蓋し、この句の翻案である。

若し、この程度に慾を制して、攔んだ金米糖を手放したならば、老人の手も、自由に、壺から抜けたであらう。大震、大火の死傷者も、その幾割かは、無事なるを得たであらう。残念至極!

一〇二〇 熊澤蕃山君子の心

◇智者は物を以て物を視る。「熊澤蕃山」

一、仁者の心は、動きなきこと、大山の如し。無慾なるが故に、静かなり。

一、仁者は、大虚を心とす……何をか好み、何をか悪まん。義と従ひて安し。

一、智者の心は、留滞なきこと流水の如し。穴に盈ち、低きに就きて、終に、四海に達す。

一、起意、才覺を好まず。萬事、止むを得ずして應ず。無事を行つて、無爲なり。

一、智者は、物を以て、物を視る。己れに等しからんことを欲せず。故に、周して比せず。小人は、我れを以て、物を視る。故に、比して周せず。

一、君子の意思は、内に向ふ。己れ獨りの知る所を慎しんで、人に知られんこ

とを求めず、天地、神明と交はる。その人、光風霽月の如し。

一、心地、虚中なれば、有することなし。故に、問ふことを好めり。勝れるを愛し、劣れるを恵む。富貴を羨まず、貧賤を侮らず……富貴なるときは、富貴に行ひ、貧賤なるときは、貧賤に行ふ。すべて、天命を樂しみて、吾れ與からず。

一、志を持するには、伯夷を師とすべし。衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に洗ふが如くなるべし。衆を容るゝには、柳下惠を學ぶべし。天、空しうして、鳥の飛ぶに任せ、海、濶うして、魚の躍るに従ふが如くなるべし。

一、人見て、善しとすれども、天の見ること善からざる事をばせず。人見て、惡しとすれども、天の見ること善き事をば、これを爲す……何ぞ、不義に與し、亂に従はんや。「熊澤蕃山」

無我といへば、直ちに、佛教を聯想する。而も、無我を以て、人間修養の詮とするのは、儒教、然り、老莊、然り、儒教の一派なる王陽明の學、最も然りで、我が熊澤蕃山には、右の説があつた。蕃山は、陽明學者である。その説、要する

に、無我を出ない。

蕃山の説、毎節、聽くべく味はふべき説ならぬはないが、吾等は、この際、特に、「智者は、物を以て、物を視る。」の一句を擧げて、世の偏狹者流に進めたく思ふ。

天地間の事を物々は、それぞれ、その特色を備へてゐる。梅には、梅の香ひがあり、櫻には、櫻の色があり、柳には、柳の姿がある。これを見る者は、その在るが如くに在るをよしとして、以て、目を樂しませ、心を慰めるのでなければならぬ。多きを望んで、

梅が香を、櫻の花に、匂はせて、柳の枝に、咲かせてしかな。

などいふのは、到底、偏狹者流の事である。

人を見ること、亦た、同断である。梅や櫻が、独自の特色を備へてゐる如く、人も、各人、一己の特色を具へてゐる。即ち、個人性を具へてゐる。主義を異にし、信仰を異にし、趣味を異にし、嗜好を異にし、長所を異にし、短所を異にし、理想を異にし、志望を異にして、實に、

十人十色「日本俚諺」

である。広い世の中ながら、自分と同じ型の人間といふものは、滅多にあるも下のではない。これを不快として、

『誰某は、氣に喰はない男だ。』と怒り、芝居好きが、角力好きを笑ひ、上戸が、戸を侮る、といふやうであつたら、世間に喧嘩の種は盡きまい。

氣に入らぬ、風もあらうに、柳かな。

人は人、自分は自分、人をして、人の在る如くに在らしむるの雅量があつてこそ、我々は、不平のない世渡りが出来る。智者とも、仁者ともいはれ得る。

故に曰く、「智者は、物を以て、物を見る。」と。

抑も、何の用意があつて、廣量、斯くの如きを得るか。無我の二字をそれとする。小人には、「我れ」がある。有我、我執、萬物、萬人をして、我が意の如くに在らしめやうとするのが、偏狭小人の特色である。而も、廣量なる智者、仁者は、斯うした特色をさへ容して置く。

一の二一 趙普論語を讀む

◇政、は正なり。「孔子」

宋の名臣趙普は、初め、事務の才を以て聞え、學問には暗かつた。太祖は、それを遺憾に思つて、

『經書を讀むやうに。』と勧められた。普は、勅旨を畏んで、爾來、大に勉強し、

「手、卷を釋かず。」といふ程の學問好きになつた。

朝廷に、何か、大議のある毎に、普は、戸を閉ぢて、自ら、一つの筐を開き、一冊の書を執つて、切りに讀み耽り、さて後ち、出仕した。死んだ時、家人が、その筐を開いて見ると、その書は、論語であつた。論語は、普の最も敬讀した書物で、嘗つて、太宗に申し上げた言葉にも、

『臣に一部の論語がござりまする。臣は、その半部を以て、太祖を佐けて、天下

を定め、他の半部を以て、陛下を佐けて、太平を致しました。」とあつた。

天下を定め、太平を致す——論語の効用も、亦た、大といはなければならぬ。
が、趙普の言は、今の政治家輩の、到底、合點しない所であらう。

「時代が違ふ。」とのみ、一顧をも與へないであらう。彼等の見る所、政治とは、衆愚を欺いて、黨勢を盛んにし、その力を藉りて、自家の權勢慾を充足するの義である。天下の公器を濫用して、一身、一家、一派、一黨の利福を營むの義である。富豪階級に便宜を與へて、不義の財を貪るの義である。正義正道に反して、横車を押し、自分等の都合次第に、法律を制定するの義である。權謀術數、あらゆる手段を弄して、敵黨を陥るゝの義である。

斯くて、彼等の所謂る政治は、最も、質の悪い仕事である。以て、天下の太平を致さうなどは、思ひも寄らぬ。「政は、正なり。」——正を以て治まらぬ時代はなく、不正を以て治まる時代はない。政は、正である。そして、正は、「齊」であらう。國を齊ふるの道、正を措いて外にはない。政治の、宜しく、正たるべきを

主張する論語一部は、まことに、政治家の最大寶典であるが、悲しいかな、今の劣等政治家輩には、この間の消息が解らない。

それにしても、宏大、驚くべきは、論語の効用である。以て、天下を定むるに足り、以て、太平を致すに足る。以て、身を修め、家を齊ふる位は、何でもない。たゞ、世間、

論語讀みの論語知らず。
の多いことを遺憾とする。

一の二二 谷文晁張子の虎

◇己れの事業にのみ注意せよ。「ジョンソン」

講家の谷文晁は、机の上に、何時も、張子の虎を置いてゐた。門人が、その理由を尋ねると、

「この虎は、年中、首を左右に動かしてゐる。而も、制しても止めねば、促がしても急がぬ。日となく、夜となく、己れの欲する所に従つて首を動かし、人の言葉や思惑には、一切、頓着しない。畫家、文人などには、この心得が肝腎ぢや。」と答へた。門人等は、成程と合點が行き、多少、悟る所があつた。

強ひて、世間と行き方を異にして、人が右といへば、自分は、左といひ、人が西といへば、自分は、東といふ、といふ風に、逆に逆にと出るのは、決して、賞めたことではない。寧ろ、これ、偏狭の沙汰である。

が、自分に、これと定まつた、主義、主張、信念、見識がない爲めに、若しくは、人の言葉や思惑に頓着する爲めに、獨立の行動に出ることが出来ず、年中、他人の尻尾について廻つてばかりゐるのも、甚はだ、男らしくない。

今の人は、大概、此れである。然らざれば、彼れには、「俺が」の一念があり、彼れも、此れも、畢竟、我執の爲である。彼れには、「俺が」の一念があり、此れには、利害の計量がある。たゞ、無我の消息を解する者のみが、これ等の弊

に罹らないであらう。

一の二三 王女の成人

◇待てば甘露の日和。「日本俚諺」

王女が、お生れになつた。王様は、お附きの醫者を召んで、

「王女に薬を與へて、立地に成人させよ。褒美は、お前の望み次第ぢや。」との仰せ。醫者も然る者、

「畏まりました。」とお請けして、

「就きましては、只今、手許に薬がござりませんから、暫時、お暇を頂いて、それを求めて参ります。それ迄は、王女様を御覧下さらぬやう、固く、お断りして置きます。」と申し上げ、その儘、旅に出た。

斯くて十六七年も経つと、ひよつこり、歸つて來て、王女に譯の分らない薬を

服ませ、王様の前へ連れて出て、

「只今、お薬を差し上げましたら、この通り、御成人でござります。」

王様が見られると、成程、前に赤ん坊で在られた王女は、今や、娘盛りの、輝くばかりの美しさ！ 王様は、つくづく、感心して、

「お前は、眞實、名醫だな。では、褒美を取らせる。」とのことで、数々の品を賜はつた。聞く者は、

「十六七年の月日こそ、御褒美を頂くべきだのに……」と噂し、王様の愚を嗤つた。

「待てば甘露の日和。」——に、甘露を「海路」とする。何方でもよい。

事の成るのは、一面、人間の力であつて、他面、歲月の力である。何事も、時節の到来を待たなければならぬ。花は、春に咲き、實は、秋に熟する。雪中、花見の愉快を想つたり、夏日、收穫の喜びを望んだりしたとて、詮のあることではない。

それと同じく、妄りに、成功の速かならんことを欲して、一獲千金を夢み、相場事などに手を出せば、後ち、必らず、

急がずば、濡れざらましを、旅人の、後より霽るゝ、野路のむら雨。

「待てばよかつたのだ。」の悔いがあらう。

世間、これ程の道理の解らぬ者はあるまい。尙ほ且つ、時節の到来を待つことが出来ず、滅多に成功を急ぐのは、何故か。亦た、「俺が」の一念があるからである。有我、我執、こゝに於てか、遮二無二、事をやつて除けやうとする。無理無體に、我が意を遂げやうとかゝる。たゞ、無我の人のみが、靜かに、時節を待つに堪へるのである。

但し、時節の到来を待つのは、じつと、手を束ねて待つのではない。

果報、寢て待て。

といふけれど、寢てゐて、何の果報があらう。

牡丹餅、棚にあり。

といふけれど、上げたればこそ、棚にあるのである。「待てば甘露の日和。」と

は、懶惰漢を保障する諺ではない。たゞ、これ、有我の性急家の戒めである。専ら、歲月に待つ愚は、専ら、人力に待つ愚に等しい。

一の二四 熊澤蕃山 小人の情

◇己れを以て物を視る。「熊澤蕃山」

- 一、心、利害に陥りて、暗昧なり。世事に出入して、何となく忙し。
- 一、心思、外に向ひて、人前を慎しむのみ。或ひは頑空、或ひは妄慮。
- 一、順を好みて、逆を厭ひ、生を愛して、死を憎み、願ひのみ多し。順は、富貴、悦樂の類なり。逆は、貧賤、患難の類なり。
- 一、愛しては、生きんことを欲し、惡んでは、死せんことを欲す。すべて、命を知らず。
- 一、名聞深ければ、誠少し。利慾厚ければ、義を知らず。

一、己れより富貴なるを羨み、或ひは嫉み、己れより貧賤なるを侮り、或ひは凌ぎ、才智、藝能の、己れに勝れる者あるも、益を資ることなく、己れに従ふ者を親しむ。人に問ふことを恥ぢて、一生、無智なり。

一、物毎に、實義に協はざれども、當世の人の譽むる事なれば、これを爲し、實義に協ふ事も、人毀れば、これを止む……名利の人、これを、小人といふ。形の慾に従ひて、道を知らざればなり。

一、人の己れを譽むるを聞きては、實に過ぎたることにても、悦び誇り、己れを誹るを聞きては、ある事なれば驚き、なき事なれば怒る。過ちを文り、非を遂けて、改むることを知らず。人皆、その人柄を知りて唱ふれども、己れ一人、能く隠して、知られずと思へり。欲する所を必として、諫めを防ぎて容れず。

一、人の非を見るを以て、己れ、智ありと思へり。人々、自滿せざる者なし。

一、道に違ひて、譽れを求め、義に背きて、利を求め、士は、媚びと手だてを以て、縁を得んことを思ひ、庶人は、人の目を眩まして、利を得んことを思ふ。これを、不義にして富み且つ貴きは、浮べる雲の如しといへり。終に、子孫を亡

ほすに至れども、察せず。

一、小人は、己れあるを知りて、人あるを知らず。己れに利あれば、人を傷ふ事をも顧みず。近くは、身を亡し、遠くは、家を亡す……愚、これより甚だしきはなし。「熊澤蕃山」

亦た、熊澤蕃山の文。彼れは、君子の心を解剖し、此れは、小人の情を剔抉する。言々、味はふべからざるはないが、彼れに就いていふ所は、此れに就いていはんとする所である。特に贅する迄もあるまい。

一〇二五 立花宗茂の刀

◇ 雞心割くに、焉んぞ、牛刀を用ひん。「孔子」

立花宗茂、十二歳の時の事である。或る日、郊外に遊んでゐると、突然、狂犬

が現はれて、飛びついて来た。宗茂は、少しも驚かず、刀を抜いて、棟打を喰はせ、追ひ拂つた。

父紹運が、それを聞いて、

「何故、斬つて捨てなんだのぢや？」といふと、宗茂は、

「刀は、人を斬るものと聞いてをります。犬を斬るとは、曾つて聞きませぬ。」と答へた。紹運は、舌を巻いて一驚し、我が子の前途を思ひやつた。

昔の武士は、刀を自分の魂として重んじた。刀を重んじたのは、畢竟、自ら重んじたのである。

自ら重んじた昔の武士は、刀は、これ、人を斬るべきもの、以て、犬、猫に用ふるに足らぬ、とした。孔子の所謂、「雞心を割くに、焉んぞ、牛刀を用ひんや。」の心である。

が、妄りに用ふべからざるものは、武士の刀のみではない。牛刀のみではない。妄りに言語を用ひて、

口開いて、腹縮見する、柘榴かな。
の愚に出るのは、自ら重んじないのである。妄りに情を用ひて、些々たる事にも腹を立てるのは、自ら重んじないのである。妄りに耳目を用ひて、人の陰事を嗅ぎつけたがるのは、自ら重んじないのである。
世間、問題は多い。眞に、心を用ふるに足る程の問題が、何程あらう。自ら重んずる者は、一切萬事を、烟の如く、風の如くに取り扱ひ、無我、無心であるのを常とする。

一の二六 佐久間盛政の最期

◇生を棄て、義を取る。「孟子」

賤ヶ嶽の役に、柴田勝家の將、佐久間盛政は、一敗して囚はれの身となつた。豊臣秀吉は、その筋骨の逞しいのに感心して、

「何と、我が手に附く氣はないか。大國を遣はさう。何うぢや？」と勧めた。すると、盛政は、聲を勵まして、

「我れ、大國を得るものなら、直ちに、御邊を捕へて、繩目の恥ぢを與へて進ぜる。主人の仇を得報せず、敵につくなどは、思ひも寄らぬ。疾く疾く、この首を討たれよ。」と罵り、自ら求めて、刃に伏した。

人間、皆死ぬ。而も、忽ち生れて、忽ち死ぬ。莊子の所謂る、
人生は、白駒の隙を過ぐるが如し。

である。まことに、果敢ないものである。

蜂蟻の一期、槿花の榮えも暫ならぬ。

が、如何に死ぬかは、人に寄る。或ひは、清く死に、或ひは、汚く死ぬ。君子は、義の爲め、道の爲めに死ぬ。小人は、利の爲め、慾の爲めに死ぬ。

同じ死ぬ命ならば、清く死にたいものである。義の爲め、道の爲めどいふ、聖大な目的の下に死にたいものである。

それには、平素の修養が大切である。死生、利害の際に於て、進退を誤まる者は、百人に九十九人迄が、それである。たゞ、死生の眞意を了し、利害の歸趨を解して、高く、それ等の上に超然たる人、即ち、無我の人のみが、その死を美しくするに堪へるのである。

例へば、大石良雄の如くである。討入一擧の前、彼れが、赤穂華岳寺の僧惠光等に與へた書中に、

良雪様、去年以來の御物語、失念仕らず、具さに存じ出し、此度、當然の覺悟に罷成、忝次第に御座候。

の一句がある。良雪は、赤穂新濱正福寺の住持である。赤穂に在るの日、良雄は、この僧から、禪の話などを聞かされ、死生の問題に就いて、略ほ、悟了する所があつたのであらう。能く、一死を潔よし、義人の名、今に及んで、天下に噴々たるもの、不思議ではない。

佐久間盛政は、剛愎自用、爲めに、事を破るに至つたと傳へられてゐる人である。而も、最期の狀を見れば、亦た、義の爲めに死んだのである。その死や、甚

はだ清い。人間、皆死ぬ。願はくは、良雄の如く、盛政の如くに死にたいものである。

一の二七 欺された隠居

◇寒時には、閑梨を寒殺し、熱時には、閑梨を熱殺せよ。「洞山禪師」

右隣が撃劍の道場。朝から晩迄、ちやんちやん、どたばた。左隣が鍛冶屋。夜晝、引つ切りなしのちんかんちんかん。中に挟まつた金持ちの隠居は、やり切れな

「あゝ、こんなに騒々しくては、命も背も堪らぬ。二軒が、どこかへ轉宅して呉れるなら、その費用位は出すのぢやが……」といふと、それを聞きつけた鍛冶屋の主人、道場の先生を語らつて、共々、隠居を訪ね、
「え、永々、御厄介になりましたが、都合上、他へ轉宅しますから……」と、

暇乞ひの口上に及ぶ。隠居、

『それはそれは、お名残り惜しい。口にはいへど、内心は大喜び。喜びの餘り、五十兩づつ、二包みの金を取り出して、

『これは、錢別に差し上げる。』

『恐れ入ります。』

『何、私の寸志ぢや。納めて下さい。時に、どこへお轉宅かな?』と尋ねると、

『はい、手前が、先生のお跡を借りました。』

『拙者が、鍛冶屋さんの家へ入るのでござる。』

X

X

X

儘にならぬが世の習ひ、周圍を見廻すと、一から十迄、氣に喰はない盡しである。自分の親子、兄弟、夫婦を始め、住んでゐる家の構造迄が、氣に喰はない。工場の烟が、氣に喰はない。近所の騒々しいのが、氣に喰はない。夏の寒さが、氣に喰はない。冬の寒さが、氣に喰はない。天候が、氣に喰はない。時々やつて来る、雨、風、地震、雷、火事が、氣に喰はない。癪に障る。腹が立つ。

『眞實、儘にならぬ世の中だ。』と、溜息で日を送る者、凡人の大部分が、皆、それである。

然り、凡人は、それである。智者は違ふ。何んな境遇に在つても、不平なく、不満なく、儘にならぬ世の中を、無理から、儘にならせやうなどとはしないで、却つて、その境遇に順應し、同化しやうとする。水に逆らつて船を漕ぐ者は、必然、身を苦しめなければならぬ。流れに任せて、一葦の之く所を縦まにすれば、些かの勞なくして、江上の風月を楽しむことが出来る。境遇が、氣に喰はないのは、境遇に逆ふからである。周圍が、癪に障るのは、周圍に逆ふからである。

僧あり、洞山禪師に向つて、

『寒暑到来の時、如何か廻避せん?』と問うた。禪師の答へに、

『無寒暑の處に向つて去れ。』

『無寒暑の處とは?』

『寒時には、閑梨を寒殺し、熱時には、閑梨を熱殺せよ。』亦た、境遇に順應せよとの心である。

一の二八 藤田東湖の忠孝一致論

◇君に事へて忠ならざるは孝に非ざるなり。(曾子)

夫れ、孝子の身を敬しむは、身體髮膚も、敢へて毀傷せず。況んや、大義の我れに在る者。豈に、獨り、虧くべけんや。然らば則はち、進んで君に事へ、その大義を全くするは、乃はち、親に孝なる所以なり、君子の君に事ふるは、委吏、乗田も、敢へて、苟且にせず。況んや。風教の治に關する者、豈に、獨り、忽せにすべけんや。然らば則はち、退いて親を養ひ、その風教を助くるは、乃はち、君に忠なる所以なり。忠と孝と、固より、その本を二にせず。處る所の何如に在るのみ。而るに、忠孝不全の説を立つる者、則はち曰く、家居して親を養へば、則はち、身を君に致すこと能はずと。これ、徒らに、夙夜、公に在るの忠たるを知りて、綱常を扶植するの大忠たるを知らざるなり。又た曰く、死を以て國に殉すれば、則はち、力を父母に竭すを得ずと。これ、徒らに、冬温、夏清の孝たる

を知りて、身を殺して仁を爲すの大孝たるを知らざるなり、「藤田東湖」

國民として、一死、國に殉するのは、理の當然、事の已むを得ざる所である。即ち天命である。天命に従つて、爲めに、力を父母に竭すことが出来なくなつた所で、決して、それを不孝とはせぬ。これを不幸として、生命を全くしやうとするのは、私心の爲で、これを無理といふ。無理は、通らない。通るにしても、避けなければならぬ。

のみならず、この身は、父母の遺體である。身を大切にするのは、勿論、孝の一つであるが、所謂、身を大切にすると、單に、生命を全くするの意ではない。君國の爲め、同胞の爲め、といふやうな、聖大なる目的の下に、一命を捨てるのが、眞に、身を大切にするのである。従つて、孝の大なるものである。宗尊親王の御歌に、

君のため、世のため何か、惜しからむ。捨て、かひある、命なりせば。忠孝一本の理、疑ふを要せぬ。安んじて、一死、國に殉すべきである。

一の二九 小早川隆景の歌

◇面白の春雨や、花の散らぬ程降れ。「俚諺」

小早川隆景が、晩年、三原に退隠してゐると、京都から、入道梅林といふ者が来て、

「この頃、京都で流行つてゐる小謡でございます。』といつて、「面白の春雨や、花の散らぬ程降れ。」の歌を示した。隆景は、非常に、面白く思つて、

面白の武道や、文學を忘れぬ程。

面白の好色や、身を亡さぬ程。

面白の儒學や、武備の廢らぬ程。

面白の權勢や、他に誇らぬ程。

面白の酒宴や、本心を失はぬ程。

面白の利慾や、義理の道塞がらぬ程。

と書き續け、廣島なる毛利輝元の許へ贈つた。

X X X

一利一害は、物の數である。利のみあつて、害のない物はなく、害のみあつて、利のない事はない。利といへば、害を意味し、害といへば、利を意味する。

例へば、花を咲かす雨は、花を散らす雨である。帝都四十萬戸を焼き盡して足らず、死者十萬を出した火は、平生、人を暖め、人の爲めに、物を煮焚きた火より外の火ではない。

右の一二例にも見える通り、事物の害は、「過ぎる」といふことから生じて來る。利も、過ぎれば、害となり、善も、過ぎれば、惡となる。

然るに、我々小人は、左右、事を過し易い。最も、慾を過し易い。慾にも、色々あらう。拜金主義の今の世には、取り別け、金の慾を過し易い。斯くて、吝嗇となり、貪慾となり、人に施すに、非理、非道を以てして、その怨恨を買ひ、結局、身を亡ぼすやうな場合にも立ち到る。思はなければならぬ。

一〇三〇 西園寺公衡慾を塞ぐ

◇念を懲して、慾を塞ぐ。「易經」

左大臣西園寺公衡は、望み次第、太政大臣に上れたけれど、「珍らしくもない。一の上で止めやう。」といつて出家し、竹林院入道と號した。一の上は、左大臣の事である。

すると、後ち、左大臣洞院實康も、それを聞き、一の上に満足して、太政大臣の望みを捨てた。

人の慾には、限りがない。限りのない慾を、どこどこ迄もと追ひ追つて、爲めに、自ら禍ひするに終る者、小人は、皆、それである。「念を懲して、慾を塞ぐ。」の一語、萬人保身の大經でなければならぬ。

而も、慾を塞ぐの必要は、貧賤の人に於てよりも、富貴の人に於て、一層、顯著である。貧賤の人は、過去の經驗、現在の境遇に鑑みて、慾の容易に遂げらるべくもないこと、知り、平生、心がけて、慾を塞ぎ、慾を制する。富貴の人は、これと經驗、境遇を異にする。従つて、今後の事、亦た、意の如くならざるなしとして、愈よ、慾心を熾んにし、益す、欲望を大にする。これを遂ぐるの間、無理が出来るのは、當然の理である。無理は、通らない。と、家を滅し、身を亡すに至るのは、

驕る平家は、久しからず。

の諺を遺した、平氏一門のみの事ではない。

であるから、何人も、「念を懲して、慾を塞ぐ」ことを要する中に、現に、順境に在る富貴の人は、最も、この心がけがなくてはならぬ。

□節制は、徳の、最も大なるものなり。

ブルターク

二の三一 自分を見失ふ

◇仁は、人の心なり。「孟子」

公儀の御沙汰で、罪人を送つて行く男、途中で日を暮し、已むなく、宿屋へ入つた。罪人は坊主、なかなか、狡猾い奴で、

『お前、酒を飲まないか。』といふ。

『飲みたいけれど、文なしではね。』

『大丈夫だ。金なら、愚僧の懐ろにある。牢へ入れられる身に、金は要らない。皆な、お前にやるよ、うんと飲むさ。』

『それは、あり難い。』といふと、男は、早速、酒を命じて、二三升も飲み干し、その儘、酔ひ潰れ、鼾聲、雷の如くである。

と見澄した坊主は、自分の繩を解き、男の着物を自分が着て、自分の法衣を男

に着せ、男を縛つた上に、その髪を剃り落して置いて、逃けてしまつた。

朝になつて、目を覺した男、

『おや、坊主がゐない。さあ大變！』と驚きながら、見ると、自分は、法衣を着てゐる。縛られてゐる。頭はくりくり坊主！ 二度びつくりの體で、

『否々、坊主は、こゝにゐる。すると、俺が、どこかへ逃げたのだな。』

× × ×

自分を見失ふ——呆れたわけではあるが、退いて思ふに、我々が、やはり、その仲間内ではあるまいか。天下滔々、皆、己れの本心を見失つてゐる。

心に、本心があり、妄心がある。憎悪、憤怒、怨恨、羨望、嫉妬、猜忌、傲慢、輕侮、譎詐、虚飾、貧慾、吝嗇、私慾、私心、冷酷、無情の類、すべて、妄心に屬して、人は、以て、本心と誤まる。これ、本心を見失つてゐるのである。

本心とは何？ 本心の何たるやは、妄心の何たるやを見れば解る。妄心は、有我がの迷見に由來する心である。人は、元來、無我のものである。我れなきに、我れありとし、地、水、火、風の寄せ細工、本來空のこの身を目して、常住不變の

我れとして、これに執着する所から、憎悪、怨恨、さまざまの妄心を生じて、人を苦しめ、自ら苦しめる。若し、能く、無我の理を知れば、復た、憎悪なく、復た、怨恨なく、ある所は、たゞ、彌陀の光明である、観音の慈悲である。儒教に所謂る仁である。これを名けて、本心といふ。

孟子曰く、

人、雞犬の放るゝあれば、これを求むるを知る。放心あれども、求むるを知らず。學問の道、他なし。その放心を求むるのみ。

と。雞が重いか、本心が重いか。犬が軽いか、本心が軽いか。思はなければならぬ。



二の一 豊臣 秀吉の遺訓

◇ 人生、死し易く、蜉蝣、世に在り。「金樓子」

- 一、慾をはなるべし。
 - 一、女に心ゆるすな。
 - 一、人と物あらそふな。
 - 一、朝ねするな。
 - 一、何事も、人なみになれ。
 - 一、身の行末、つゝしむべし。
 - 一、何事も、つくぐ、物ひげすな。
 - 一、物にたいくつするな。
- つゆとおき、露ときえぬる、我が身かな。なにはの事は、

ゆめの世の中。「豊臣秀臣」

我が國の英雄、豊臣秀吉を以て、その最大なるものとする。而も、吾等は、その身を水呑百姓に起して、天下を掌握し、更に、大明四百餘州を驚かすに至つた事蹟に於てよりも、その海、濶うして、魚の躍るに従ひ、天、空しうして、鳥の飛ぶに任す底の大度量、衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流れに濯ふ底の大襟懷に於て、大英雄の大英雄たる所以を見る。

掲出の家訓一篇、「慾をはなるべし。」といひ、「人と物あらそふな。」といひ、「何事も、つくづく、物ひけすな。」といひ、「物にたいくつするな。」といひ、殊には、「なにはの事は、ゆめの世の中。」といふが如き、英雄、心を用ふるの要訣を了すべく、秀吉の平生と對比し來つて、意味の極めて深長なるを覺える。「なにはの事は、夢の世の中。」——まことに、人生は、一夢の如くである。夢に王侯となる者は、覺めて、乃ち、元の本阿彌である。夢ならずして、王侯となる者も、

人生、百年なし。能く、幾何の日あらん。況んや、百年は、三萬六千日なるをや。(白玉蟾集)

で、忽ち死ねば、在りし日の富貴、榮華は、たゞ、一場の夢に過ぎぬ。哀れなるかな!

この哀れを哀れとして、一切の現世的欲望を放捨し、貧賤に安んずるのは、達士の事である。常人には望まれない。たゞ願はくは、萬事の、結局、夢に歸し去る所以を會得し、夢中の物なる富貴や、榮華やに、執着するなからんことを。

二の二 武田信玄欺かず

◇正直なる人は、骨の爲めに、犬とならぬ。「丁抹俚諺」

河中島の戦ひは、十有餘年の久しきに亘つて、勝敗が決しなかつた。敵も、味方も、倦み果てた所で、双方から、一人づつ、力士を出し、その角力一番によつ

て、多年の紛争を解くことに、協議が纏まつた。

永祿七年秋八月、武田方の安馬彦六、上杉方の長谷川與五左衛門、これ等の兩力士は、敵味方環視の間に、土俵へ登つた。そして、互ひに死力を竭して、虚々實々、揉み合ひ、搏ち合ひする程に、行司の軍扇は、結局、與五左衛門に擧げられた。上杉方の見物人が、狂せんばかりに打ち喜び、鳴りも止まぬ鬨の聲には、大地も揺ぐかと思はれたに引き變へて、武田方の見物人は、ぐうの音もなく、悄氣返つた。

が、残念でならぬ。これを機會に、一撃を上杉方に與へてくれやう、と犇めいたが、信玄は、儼然として、
「一旦、約束した事ぢや。今更、そんな未練がましい眞似はならぬ。」と叱止し、この時限り、上杉氏の爲めに、川中島四郡の地を割いた。

人間、正直でなければならぬ。拙堂和尚の歌に、
八百の、嘘を上手に、並べても、誠一つに、敵はざりけり。

位くらるのことは、誰たれも知しつてゐる。雷かみなりに、知しつてゐるのみではない。又た、正直ちかを守り、正直ちかを行なふ誠意まことを持つてゐる。近來、商業道徳も、漸く進歩して、嘘うそを吐つくものと定まつてゐた商人も、何うやら、正直ちかに、正直ちかにと、心がけるやうになつて來た。まことに、喜ばしい現象である。

が、その正直ちかには、大概、制限せいげんがついてゐるらしい。自分の利益と一致する時には、勿論、正直ちかを守る。僅かの損害で濟む時にも、先づは、忍んで、正直ちかを守る。若しそれ、一身の浮沈、一家の盛衰に關する、といふやうな場合にも、尙ほ且つ、正直ちかを守り、前言を踐んで失はない者が、今の世の中、幾人あらう？
『止むを得ないさ。』とばかり、約束を反古にして、自ら宥し、人も恕す。今の所謂正直は、斯うした、制限つきの正直である。

止むを得ないか、止むを得ないか。さばれ、
人の生くるや、直し。罔あやひて生くるは、幸さいひにして免る。「孔子」
で、人は、元來、正直なるべきものである。利害の爲めに、正直を失ふのは、やがて、人たるを失ふのである。骨の爲めに、犬となるのである。利害、如何？

利害に明かなる人、案外に、利害に味くはないか。

小人の心は、左右、物に留りたがる。即ち、物にこびりつき、物に執着する平たくいへば、物を掴んで、どこどこ迄も手放すまいとする。

自然、その物に役せられる結果を來して、無益に心を苦しめ、果ては、身の破滅となるのである。

已れに克ちて、禮に復るを、仁と爲す。「孔子」

武田信玄、或る時、左右を顧みて、

「身分の大小に關はらず、誰れでも、その身を保つことの出来る道が、たつた一つある。」といひ出した。

『どんな道でござりまする?』と問へば、

「したい事をせず、したくない事をする。たゞ、この一途ぢや。」信玄は、斯くと答へて、一同の力行を促した。

耶穌教の牧師先生に聞くと、人は、神に似せて造られたもの、即ち、神の子

であるといふ。孟子は、

仁は、人の心なり。

といつた。論語に、

性、相近く、習ひ、相遠し。

とある性が、仁義諸徳を具へた所の、善なる性の意であることは、想像に難くない。佛教では、

一切衆生、悉有佛性。

(一切衆生、悉く、佛性を有す。)

と説く。何れにしても、人間、元來、非常に立派なもので、犬、猫、牛、馬の類ひではなく、實に、萬物の靈長であるといふことに見てゐるのである。

人間、果して、然る立派なものであらうか。事實は、却つて、人間の、極めて下らないものであることを證しはせぬか。

即ち、人をして、忌憚なく、その欲する所を爲さしめよ。したいが儘にさせて置け。彼等は、善に向ふか。惡に向ふか。

心は、猿猴の如し。五欲の樹に遊びて、暫くも住まらず。「心地觀經」といふもの、これ、人間の常態ではないか。荀子に性惡説ある所以である。動もすれば、あらぬ方にと、駈け出す、心の駒の、手綱弛ぶな。の古歌ある所以である。

斯うした事實を根據として、孟子の性善説を非とし、荀子の性惡説を是とするのは、間違つてゐる。性の善惡如何は、然く輕斷し得る小問題ではない。寧ろ、人の性の、善惡二方面を混有すること、道心と人心、理性と私心——これ等の相反した二つの性質が、同じ一心に具備されてゐる事、而も、人心、私心の方が、常に、道心、理性よりも優勢である事を認めて止むに如かぬ。「したい事」は、私慾の要求である。「すべき事」は、理性の命令である。信玄の説、要は、私心の従ふべからず、理性の依るべきをいつたので、これ、至言でなければならぬ。

□眞實は、萬事の大本なり、あらゆる才力の、最大要素なり。

カ ー ラ イ ル

二の四 眞綿商 赤恥ぢ搔き

◇己れ、立たんと欲して、人を立つ。「孔子」

黄金商と眞綿商とが、一緒に、旅へ行商に出ると、逸早く、黄金商に客があつて、

『その黄金は、眞物かね？ 眞物なら、買ふんだが。』といふ。黄金商は大喜び、

『眞物ですとも！ 一應、試験しませうか。』といつて、一片の黄金を烈火の中へ

投じたまゝ、後刻を約して、その場を去つた。

眞綿商は、羨ましいやら、業が沸くやら。そつと、黄金を眞鍮と摺り換へて、

眞綿の中へ押し匿した。

所が大變！ 黄金は、熱し切つてゐる。眞綿は、見る見る、焼けてしまつて、

黄金と惡事とが、一度にあらはれ、眞綿商は、赤恥ぢを搔いた。

古人の歌に、
X X X

我が心、鏡にかけて、見るならば、嘸や姿の、醜くかるらん。
醜い心にも、色々あるが、人の幸福を羨む心位る、醜い心はあるまい。これ、女の腐つた心である、女々しい心である。

將た、人の幸福を羨む心は、その不幸を喜ぶ心である。惡むべきの至りであるが、小人の心は、皆、これである。人の幸福を我が幸福として喜び、人の不幸を我が不幸として悲しむは、思ひも寄らぬ。「己れ、立たんと欲して、人を立て、己れ、達せんと欲して、人を達す。」の同情、雅懷は、たゞ、これ、仁者のもの、小人の及ぶ所ではない。
といふのが、小人は、萬物一體の理を解せず、人我が區別を立て過ぎる。斯くて、赤恥ぢを搔いた上に、眞綿を失ひ、信用を失ふとは、何と、哀れなものではないか。

二の五 兼好法師火急の事

◇古墳、盡くこれ、少年の人。「古詩」

老來りて、始めて 道を行ぜんと待つ事勿れ。古き墳、多くはこれ、少年の人なり。

圖らざるに、病ひを受けて、忽ちに、此の世を去らんとする時にこそ、始めて、過ぎる方の誤れる事は知らるなれ。誤りといふは、他の事に非ず。速かにすべき事を緩くし、緩くすべき事を急ぎて、過ぎにし事のくやしきなり。其の時、悔ゆとも、かひあらんや。
人は、只だ、無常の、身に迫りぬる事を、心に犇とかけて、束の間も、忘るまじきなり。然らば、などか、此の世の濁りも淡く、佛道を勤むる心も、眞實ならざらん。

昔しありける聖は、人來りて、自他の要事を云ふ時、答へて曰く、今、火急の事ありて、既に、朝夕に迫れりとして、耳をふたぎ、念佛して、終に、往生を遂げけりと、禪林の十因に侍り。心戒と云ひける聖は、あまりに、此の世の假初なる事を思ひて、靜に在りつづける事だになく、常は、躡まりてのみぞありける。」「徒然草」

皆人の、知り顔にして、知らぬかな。必らず死ぬる、習ひありとは。

とは、一休和尚の歌と聞く。多くの人が、自分の、終に、死すべきを知らぬ。知つてはるやう。確かには知らぬ。痛切には知らぬ。

將た、その死が、往々、寸刻の後に在ることを知らぬ。

斯くて、世の爲め、人の爲め、善事を施す志がありながら、

「それは、後の事だ。先づ以て、金を溜めなきやならない。十千萬長者になつた上で、大に、世間の困る者を救つてやらう。」などと、悠長に構へ込む。左右する中、志の一端をも果さずして、ほつくりと、參つてしまふ。或ひは、強欲非道

の人非人と視られて、人に譏られ、惡まれた揚句、兇刃に斃れるなどの例は、世間、少くあるまい。

この世は、無常の世である。人の命は、露よりも儚ないものである。明日、特むに足らぬ。來年、特むに足らぬ。況んや、十年、二十年の後をやで、苟くも、道を行せん志のある者は、今日を限りの我が命と思ひ取つて、實行を勵むべきである。所謂る道は、佛の道のみではない。

古歌にいふ、

今日のものと、思ひて親に、仕へかし。定めなき身の、明日な持みそ。

と。單に、親に仕へる心得とはいはない。

二の五 太田道灌の少年時代

◇自慢は、智慧の行き止り。「日本俚諺」

少年時代の太田道灌は、非常に、才氣の勝つた子で、動もすれば、人を侮り、長者を凌ぐの風があつた。父資清は、これを憂へて、或る時、

驕者不久。

(驕る者、久しからず。)

と大書して、床にかけ、道灌を呼んで、

『あの意味が解るか。』と問うた。斯くして、我が子の驕慢を戒しめやうとか、つたのである。

道灌は、黙讀一過して、

『はい、解ります。然し、あの側へ、今五字だけ、書き加へたいと思ひます。』と答へ、

『どんな字ぢや。』資清の言下に、筆を執つて、

不驕亦不久。

(驕らざるも、亦た、久しからず。)

と書きつけた。資清は、大に怒つて、この驕慢兒を取つて押へ、散々、折檻の

答を加へ、以て、その不心得を懲らした。

X

X

X

才氣の勝つた少年は、左右、高慢になりたがる。少しく書を読み、物の道理が解つて来ると、同輩を下目に見て足らず、更に、長者を凌ぐとする。その悪むべきは勿論ながら、抑も、その少年の不幸である。「自慢は、智慧の行き止り。」で、この上にも、智徳、才能を磨かうとする心がけのない彼れは、

十で神童、十五で才子、二十過ぐれば、たいの人。

といふことになつてしまふ。

因つて思ふに、少年時代の俊才は、餘り、喜ぶべきことではないのである。

二の六 支配勘定某の述懐

◇この男に、御油斷あるな。「小野日向守」、

寶曆の頃、勘定奉行を勤めた小野日向守は、極めて謹厳な、而も、機智に富んだ人であつた。或る時、代官に伴はれ、何かの願書を携へて來た商家の手代の文才に感じて、特に引見し、

「年輩といひ、文筆といひ、末頼もしい若者ぢや。折角、勉強するがよい。他日、一廉の御用にも立つであらう。」と勵ました。手代は、

「あり難うござりまする。」と禮を述べて、代官共々、日向守の前を辭した。

時に、日向守は、玄關迄送つて出て、代官に向つて、

「お代官、この男に御油斷あるな。」といつた。

前には褒めて、後には貶す。手代は、判斷に苦しんだが、後になつて、思ひ當る所があつた。

といふのが、手代は、爾來、勉強した結果、幕府に登庸され、支配勘定と迄出世したが、時々の述懐に、

「永い月日の間には、偶ま、善くない心の起ることもあつたが、その際、日向殿のお言葉を思ひ出すと、火に水を澆ぐやうに、悪心、忽ち、消失した。」とあつた

とか。日向守の一言は、蓋し、後日に備へたのであつた。

「この男に御油斷あるな。」——善いかな、日向守の一言！ 而も、この男は、誰れだらう？ 斯くいひ、斯く聞く我々自身ではないか。我々は、篤と、我々自身を省みる時、我々自身の、甚はだ、油斷のならない代物であることを發見する。

人は盗人、明日は雨降り。

などと、殺風景なことをいつて、他人に油斷しない癖に、自ら油斷して、その盗人の仲間入りなどは、滑稽事としなければならぬ。宜しく、常に、自分にいふがよい。「この男に、御油斷あるな。」と。

二の七 子蟹の逆襲

◇善し惡の、人を見る目は、ありながら、我が身の上は、烏羽玉の間。「古歌」

子蟹の遊んでゐるのを見て、親蟹が、

「お前たちは、何故、そんな歩き方をするのだ？ 横へ横へと歩いて、見ともないぢやないか。」と叱ると、子蟹、

「ぢや、教へて下さい。私たちは、他に、歩き方を知らないのですから。」

「斯ういふ風に歩くのだ。よく御覧！」といつて、親蟹は、向ふに見當をつけ、眞つ直ぐに歩かうとしたが、巧くは行かないで、右へ這つたり、左へ這つたり、その様子の可笑しさはない。子蟹は、手を打つて大笑ひ、

「お母さん、あなたに出来るやうになつてから、教へて下さい。」

目は、目を見ない。指は、指を指さない。諺にいふ、

燈臺、本暗し。

で、他人の事は、よく判るが、自分の事は、とんと、不知案内でゐる。

斯くて、自分の事は、棚へ上げて置いて、他人の事はばかりを、

「あの男は、嘘吐きだ。」の、

「あんな不人情な奴はない。」のと、口角、泡を飛ばして、罵り立て、その缺點、その性癖、短所、過失、失敗、非曲、陰事に亘つて、論難攻撃し、少しも假借する所がない。

その言を聞けば、その人、餘程、立派さうであるが、如何せん、修養を積まな
い、生れながらの人は、大概、同一水平線の上に在る。他人の嘘吐きは、自分の
嘘吐きである。他人の不人情は、自分の不人情である。他人の缺點、乃至、陰事
も、大部分は、自他共通の缺點であり、乃至、陰事である。何等の滑稽！

二の八 身死して財残る

◇富んで死ぬのは、恥辱である。「カーネギー」

身死して財残る事は、智者のせざる處なり。善からぬ物貯へ置きたるも拙く、
善き物は、心を留めけんと、はかなし。こちたく多かる、況して口惜し。我こそ

得めなんど云ふ者どもありて、跡に争ひたる、様悪し。後は誰れにと志す物あらば、生けけん中にぞ譲る可き。朝夕、無くてかなはざらん物こそあらめ、其の外は、何も持たでぞあらまほしき。「徒然草」

五七十年の間、五尺の一身を保つのに、何程の道具立てが要るものではない。巨萬の富は、全然、無用の長物である。

身、死して、財を遺すのは、お笑ひ草を遺すのである。若しくは、遺族同士の争ひの種を遺すのである。

「否、子孫の爲めでござる。」といふかも知れぬ。子孫の爲めに、巨富を遺せば、愚なる子孫は、その巨富の爲めに、人に欺かれる。賢なる子孫は、同様、その志を殺ぐ。これ、子孫の爲めではない。偶ま以て、子孫を賊ふに足るのである。

であるから、西郷南洲は、

子孫の爲めに、美田を買はず。

といふを以て遺法とした。それでよい、それでよい。

眞に、子孫の爲めに計らうとならば、金を遺すよりも、教へを遺すがよい。富を積むよりも、徳を積むがよい。「積善の家には、餘慶あり。」で、父祖の善事は、必らず、子孫を潤ほしこれをして、飢餓に泣かしむるやうなことは、決して、決して、ないのである。

二の九 加藤清正の人物鑑定法

◇律義者の子澤山。「日本俚諺」

加藤清正は、勇士を欲しく思つて、一生の間、人物の見別け方に心を盡し、人相見迄も、稽古したが、到頭、その術を得るに至らなかつた、けれど、多年の経験に照らして、たゞ一個條、

「律義者に武邊者が多い。」との結論に達したとのことである。

律義者は、正直者である。正直者は、誠の人である。名譽を求めるとか、利祿を貪るとかいふ不純な考へは、毛頭なく、たゞ、本心の命する所、至情の然らしむる所に従つて、慕直に進前する人である。

斯くの如き人に、勇者が多いといふ。蓋し、不正直、不誠實の輩は、戦場に臨んで、奮闘力戦の勇を振ふにしても、その勇たる、元々、名譽を求むる爲めの勇である。利祿を貪る爲めの勇である。彼れには、「自分の爲め」といふ不純の考へがある。勇を振ふ間にも、身命を惜しむ心持ちがあり、従つて、怯れる所があり、臆する所がある。この輩、決して、眞の勇者ではあり得ない。

嘗に、戦場の事のみでばない。西郷南洲はいつた、

命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にし、國家の大業を成すこと能はず。然れども、此くの如き人は、凡俗の眼には見るべからず。

と、亦た、眞に勇なる誠の人、律義者の説と見てよい。

眞の勇者には、眞の功がある。「律義者の子澤山。」は、寧ろ、「律義者の功澤山。」

と改めて、事實に近いであらう。

二の二〇 塚原ト傳門人を評す

◇抜かぬ太刀の功名。「日本俚諺」

塚原ト傳の弟子某、餘程の手利きであつたと見えて、人も、我も、一の太刀の極意を授けられることと思つてゐた。

或る時、某が、路傍に繋いだ馬の後ろを通りかゝると、俄かに、馬が跳ねた。

某は、ひらりと飛び退いて、危難を免れた。居合せた人たちは、口々に、その早技を賞め、その由を、ト傳に告げた。

すると意外、ト傳は、面を澁めて、

『さては、一の太刀を授ける器ではない』と、最も不満けにいふのであつた。斯くと聞いた人たちは、

「不思議ぢや。では、先生を試して見やう。」と語り合ひ、無類の跳ね馬を繋いで置いて、ト傳を招き、物陰から見ると、ト傳は、遠く離れて、馬の後ろを通つた。馬は、跳ねやうともしなかつた。案に相違の一同は、顔見合せて、苦笑した。

が、合點が行かぬ。ト傳を訪うて、

「何故、某の早技をお賞めなさらぬ？」との質問を發した。ト傳の答へに、

「然ればでござる。彼れが、馬は跳ねるもの、といふことを忘れて、うかと、その後ろを通つたのは、これ、油断と申すもの。危く、飛び退いたのは、僥倖に過ぎぬ。僥倖なら、下手も、間々勝つ。劍術は、先を忘れず、機を抜かぬのをよしと致す。彼れの手腕は、まだまだ、一の太刀に及ばぬことが多い。それ故、賞めぬのでござる。」とあつたとか。

人間、刀を抜いて、鬪はなければならぬ場合もある。成るべくば、避けたい。

君子は、争ふ事なし。

といふ聖人の語もあるから。

争はず、鬪はないのは、負けるのではない。敵を屈服させ、我がいひ條を貫いて、凱歌を奏するには、必らずしも、刀にかける必要はない。血眼になつて、喧嘩口論するには當らない。此方に正理のある限り、悠々不迫、談笑の間にも、尙ほ能く、捷利を得ることが出来る。

而も、これ、捷利の最上乗なるものである。刀を弄すれば、敵を虐める代りには、自分も、多少の手疵を負はなければならぬ。

こゝに於て、『抜かぬ太刀の功名。』といふ諺がある。

抜かぬ太刀の、功名こそは、勝れたれ。放たぬ矢にて、射るも同然。「手島皆庵」といふ古歌もある。取つて以て、世の喧嘩好きに薦める。

二の二 抜けた駕籠の底

◇槍持ち、槍使はず。金持ち、金使はず。「日本俚諺」

花嫁さん、駕籠に乗つて出かけると、駕籠がやわだつたのか、尻の目方が勝つたのか、途中で、すつほり底が抜けた。駕籠昇き共は、大に困つて、

「花嫁さんに、歩いて貰ふわけにも行かず、といつて、駕籠を取り換へて来るには、道が遠い。その邊には、駕籠を貸す家もあるまいし、さあ、何うしたものだらう？」と當惑顔！花嫁さんは、それを聞いて、

「お前がた、何も、心配することはない。妾に妙案があるから。」

「この儘、昇いで行つてお呉れ。妾は、駕籠の中を歩いて行くから。」花嫁さんの言葉に、

「なある程！」と、一同大笑ひ！

駕籠は、何の爲めにか乗る？ 歩行の勞を助かりたい爲めである。底の抜けた駕籠の中を歩いた花嫁御は、雷に、安樂を得なかつたのみならず、その駕籠が邪魔になり、駕籠の爲めに苦しめられて、歩き辛さは多く、足の疲れが、一入で

あつたであらう。

これを稱して、道具に使はれる、といふ。人は、左右、道具に使はれ、持ち物に使はれ、金に使はれて、爲めに勞し、爲めに苦しみ、年中、肩の休まる時はなくて、尙ほその揚句には、命をさへ棒に振る。哀れなものではある。

協坂義堂の「雨やどり」に、

槍持ち、金持ちに問うて曰く、諺に、

槍持ち、槍使はず。金持ち、金使はず。

といふ……如何なる譯だ。

金持ちの曰く、これには、段々、品あるべし。金銀を世界の寶と知る人は、儉約を本として、自身の榮耀、物好きには、金を使はず、義あつて使ふ金も誰れが金使ひといふべきぞ。さて又た、金銀を己がもの恃む人は、金を持つても、吝き故に金持ち、金使はず。」と譏らるゝ。金持ちの、金を使はぬには吝嗇あり、儉約あり。公あり、私あり。活すもあり、殺すもあるべし。さて又た、使ふべき爲めの金は使はず、却つて、金に使はるゝ人もあり。こ

れは、金持ちばかりではなく、道具持ちは、道具に使はれ。子持ちは、子に使はる。家、屋敷を持ちたる人は、その家、屋敷の爲めに使はれ、人数多抱へた人は、その数多の人に使はる。

これも亦た、人によるべし。道も知り、足ることを知りたる人は、金持ちにも、その金に使はれず、持たざれども、その持たざるに使はれず。道も知り、足ることを知らざる人は、金あれば、あるに使はれ、なければ、又た、そのなきに使はる……

槍持ち、復た問ふ。

金が敵

といふ世話あり。金持ちは、皆、敵持ちか。

金持ち、笑つて曰く、金、何ぞ敵ならん。金は、素より、寶なり。素より、金は、寶なれども、これも、亦た、持ち人によるべし。金を持ちながら、恵むべき人を恵まず、貸すべき人に貸さざれば、恨みを受け、貸せば、亦た、恨みらる。金の出入が、公事となり、敵同士になるもあり、或ひは、金の損

失に心氣を打ち、病うて死ぬるもあり。金故、火に焼け、水に溺れ、又た、盗賊、夜盗の爲めに、命を失ふ人もあり。金が敵か、怨が敵か。金が寶か、命が寶か。金持ちの金か、世界の金か。

槍持ちの曰く、金持ちの金か、金持ちの金に非ざることとは、槍持ちの槍が、槍持ちの槍に非ざるにて知りぬ。然るに、金持ちは、

錢金を、我が物顔に、恃むなり。追つけ土と、なるを思はで。

金に使はれ、持ち物に使はれ、道具に使はれて、一年三百六十五日、役を汲々休するを知らざる者、思はなければならぬ。

二の二 恒産と恒心と

◇天下の憂ひに先だちて憂ひ、天下の樂みに後れて樂しむ。「孟子」

心無しと見ゆる者も、善き一言は、いふ者なり。或る荒夷の、恐ろしげなるが

傍に逢ひて、御子はおはすや、と問ひしに、一人も持ち侍らず、と答へしかば、さては、物の哀れは知り給はじ。情無き御心にぞ、ものし給ふらんと、いと怖ろし。子故にこそ、萬づのあはれは、思ひ知らるれ、と言ひたりし。然もありぬべき事なり。

恩愛の道ならでは、斯かる者の心に、慈悲ありなんや。孝養の心なき者も、子持ちてこそ、親の志は、思ひ知るなれ。

世を棄てたる人の、萬づに匹如身なるが、なべて、羈絆多かる人の、萬づに諂ひ、望み深きを見て、無下に思ひ下すは、僻事なり。其の人の心になりて思へば誠に悲しからん。親の爲め、妻子の爲めには、耻ぢをも忘れ、盗みをもしつべき事なり。

されば、盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の、飢ゑず、寒からぬ様に、世をば行はまほしきなり。人、恒の産無き時は、恒の心なし。人、窮まりて盗みす。世、治まらずして、凍餒の苦みあらば、科の者、絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不便のわざなり。

さて、如何がして、人を恵むべきとならば、上の驕り費す所を止め、民を撫で農を勧めば、下に利あらん事、疑ひあるべからず。衣食、尋常なる上に、僻事せん人をぞ、誠の盗人とは言ふべき。

昔も、今も、政治の要は、二個條に歸する。曰く、人民の生活を安定ならしめ飢餓、凍餒の憂ひを除くこと、これ一つ。人民を教へ導いて、善に就き、正に依らしむること、又た一つ。

而も、聖人の語に、

衣食足りて、禮節を知る。

恒の産なき者は、恒の心なし。

小人、窮すれば、こゝに濫す。

などあれば、前者、即ち、人民の生活を安全ならしむること、これ、爲政者の急務でなければならぬ。貧富の懸隔の、漸く甚だしからんとする今日に於て、特に、その然るべきを思ふ。

如何か、人民の生活を安定ならしむる？ それには、種々の方法があらう。社會事業といひ、社會政策といふの類、その期する所、こゝに在つて、而も、方法は、末である。人は、本である。政治といふの、所詮、同情の仕事であることを了し、人民の上に、先憂後樂の誠意を有する政治家のみが、能く、その生活を安定ならしめ得るのである。

今の職業政治家、利己的政治家の如きは、いふに足るものではない。

二の二三 正しき服装

◇服装の自墮落なるは、心に油斷ある證據なり。「ドン、キゾーン」

松平伊豆守信綱は、世に「智慧伊豆」の名のあつた人である。この人、出仕の際は勿論、屋敷に在つても、決して、裏附きの社袴などを着けなかつた。問ふ者があると、

「人の心は、服装によつても變る。出仕して、心に恭敬を存せぬのでは、忠を盡すこと、思ひも寄らぬが、それには、先づ以て、衣服から氣をつけて、恭敬を忘れぬ心得が大切ぢや、餘人は知らず、自分に於ては、斯くしなければ、忠勤もなりかねる。」と答へた。

服装を正しくするのは、心を正しくする所以である。

服装を正しくするとは、美衣美服を纏ふの意ではない。今の人は、猫も、杓子も、服装に腐心し、男は、俳優を學んで装ひ、女は、賣春婦に似せて着飾る。これ、服装を正しくするのではなくて、却つて、これを猥らにするのである。

服装を正しくすることが、心を正しくする所以であるならば、服装を猥らにするのは、心を猥らにする所以でなければならぬ。

因つて思ふに、今の世、俳優風の柔弱男子、賣春婦流の淫奔女が多いのは、その原因、一つは、その服装に在るか。敢へて、虚飾家の一考を煩はす。

二の二四 井伊直孝の教訓

◇油斷大敵。「日本俚諺」

永井信濃守尙政は、老中職を授けられた時、井伊直孝に對面して、
「不肖尙政、斯かる大任を拜して、甚はだ、恐懼に堪へ申さぬ。御教訓を得て、
事なく、勤め終せたいと思ひます。」と乞うた。直孝は、
「御道理！」と頷づいて、

『では、教へて進ぜやう。明朝、身を潔めて、お出でなされ。』と答へた。
斯くて、その翌朝、信濃守は、齋戒沐浴、禮服を着けて、直孝を訪うた。直孝
は、これを一室へ請じ入れて、

「世の諺に、
油斷大敵。」

と申すことがござる。萬事は、皆、油斷から破れる。この事、努め、お忘れあ
るな。」と諭して、多くをいはなかつた。

貧賤に在つて、油斷しなかつた者も、富貴に及べば、追々、油斷する。逆境
に在つて、油斷しなかつた者も、順境に立てば、漸く、油斷する。斯くて、本の
木阿彌に歸る例の多いことを思へば、油斷は、まことに、大敵である。

富貴に在る人、順境に在る人が、左右、油斷し易いのは、己れの實力を過信
して、事を侮り、俺が、俺がの慢心から、無理な望みを起し、而も、容易く、そ
の望みを遂げ得るものと誤解する。さて、油斷し、失敗して、口あんぐりとなる
のである。

果して然らば、「油斷大敵」の諺は、特に、富貴に在る人、順境に在る人の爲
めの好教訓である。

二の一五 二十里の道

◇名は、實の賓なり。「老子」

昔し、王城から二十里を距てた或る村に、至極、清らかな泉があつた。王様はその村の人に伝附け、毎日、その水を王城に運ばせられた。

村の人には、これ、非常の御難である。やり切れない所から、全部、他へ引き移らうとすると、村の長が、これを宥めて、

「待て、待て。俺が、王様に願つて、二十里の道を、半分の十里にして貰ふことにするから。」と、直ちに、王城へ罷り出で、そのよし、懇願に及んだ。王様は、「可し！ 今日以後、二十里の道を十里に改め遣はす。益す、忠勤を勵むやう。」と命じられた。村の人は、一同、非常に喜んだ。或る人、それを聞いて、

「何うして、道が近くなつたか。二十里が十里になつたといふのは、たい、名目だけのことで、道は、やつぱり、以前の道だ。馬鹿々々しい。」と大笑ひ！ けれど、村の人は、満足して、一人も、他へ去る者がなかつた。

名は、實の賓である。必然、實に伴ふものである。實のある所は、名のある所である。

が、反對にいつて、名のある所、必らずしも、實のある所ではない。紳士の名があつて、紳士の實がなく、却つて、車夫、馬丁に劣るもあれば、政治家の名があつて、政治家の實がなく、却つて、公盗なるもある。宗教家の名があつて、宗教家の實なきがあり、教育者の名があつて、教育者の實なきがある。番に、「ある」といふのみではなく、今の世には、この種の贋せものが多い。話の村人は、十里の名に欺かれて、二十里の道に甘んじた。我々は、心がけて、贋せもの、名に欺かれてはならぬ。

二の二六 他に勝るふと

◇他に勝る事のあるは、大なる失ちなり。「徒然草」

「一道にたつさはる人、あらぬ道の席に臨みて、あはれ、我道ならましなば、斯く、餘所に見侍らじものを、と云ひ、心にも思へる事、常の事なれど、世に悪く覺ゆるなり。知らぬ道の羨ましく覺えば、あな羨まし、などか習はざりけん、と言ひてありなん。」

我が智を取出で、人に争ふは、角ある物の角を傾け、牙ある物の牙を嚙出す類ひなり。

人としては、善に伐らず、物と争はざるを徳とす。他に勝る事のあるは、大なる失ちなり。品の高きにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽れにても、人に勝れりと思へる人は、假令、言葉に出で、こそ言はねども、内心に、若干の科あり。慎しみて、之れを忘るべし。

をこにも見え、人にも言消され、禍ひをも招くは、只、此の慢心なり。一道にも、實に長じぬる人は、自ら、明かに、其の非を知る故に、志、常に満たずして遂に物に誇ることなし。「徒然草」

人として、知識、才能、技藝、手腕、財産、地位、その他、何なり彼なりに於て、他に勝る所があるのは、結構な事に相違ない。然かありたいものであるが、

そこに、恕すべからざる弊がある。左右、高慢になり易いこと、これ、他に勝る所のある者の通弊である。人に見せびらかして足らず、好んで、これと口論しこれと争ひ、これを侮り、これを下目に見やうとか、下目に見られる者、下目に見られて止む者でなければ、必らず、誹謗の言、以て、これに酬いる。高慢であるだけに、人言を気にすることも、人一倍で、爲めに苦しみ、爲めに意氣銷沈と来る。因はとへば、愁ひに、他に勝る所のあるのが悪い。

果して然らば、「他に勝る事のあるは、大なる失ちなり。」といふもの、成程、然うである。

然うとして、我々は、無智無能、何等の取柄なくして已むべきであらうか。それも、好ましくないとならば、

あれども、なきが如く、盈つれども、虚しきが如し。
の聖語を心とし、

稔る程、頭は低き、稻穂かな。

彼の稻穂に倣つて、謙遜に、謙遜にと身を持つのも、これ、肝腎である。人に誇らんが爲めの知識ならば、才能ならば、技藝ならば、手腕ならば、財産ならば地位ならば、寧ろ、ない方が勝しである。

二の二七 成瀬善く散ず

◇金銭を得よ、重ねて得よ、而して、次ぐに徳行を以てせよ。「ボーブ」

關ヶ原の役の後ら、徳川氏の士成瀬吉右衛門は、伏見に隠棲した。或る時、駿

府にゐる、その子隼人正から、金を贈つて來ると、吉右衛門は、それを天井に吊つて置いて、來客のある毎に、

『あれを見られよ、魚を食へといつて、隼人の寄越した金ぢやが、あれを見ると魚を食ふよりも樂みぢや』といつては、自ら笑ひ、相手を笑はせた。

間もなく、大阪冬の陣が起つた。その終つた頃、隼人の子が、伏見へ訪ねて來ると、吉右衛門は、

『今に、復た、戦争ぢやぞ。その時、良い馬を買へ。二十兩と出る馬は、廣い江戸にも、澤山はあるまい。』といつて、二人の孫に、それぞれ、金二十枚づゝを與へた。

積む一方で、費ふことのない金は、石、瓦も、同然である。稱して、金を殺す、

といふ。費ふにも、その途がある。衣食を奢り、口腹の慾を充すに止まるならばこれ亦た、金を殺すのである。善く積み、善く散じて、金の妙用、初めて、明白であるが、さて、その「善く」といふことが難かしい。成瀬吉右衛門の如くにして

則はち可なりである。彼れは、金を活して費つた。

加藤清正が、平生、諸士に諭した一個條に、

衣類の事、木綿、紬の類たるべし……不斷、身の上相應に、武器を嗜み、人を扶持すべく、軍用の時に、金銀をつかふべき事。

と見えてゐる。これ、以て、古武士の嗜みを見ることが出来る。

今の世、武士はない。泰平の今日、金を軍用に費ふといふやうなことは、決してないが、金の用途は、幾らもある。過般のやうな、大震災、大火災の時は勿論

凡そ、世の爲め、人の爲めといふやうな場合には、惜しげなく「金銀をつかふべき事」の一個條が、金を積む者のモットーでありたい。斯くてこそ、善く積み、善く散ずるものといへやう。金を活して費ふものといへやう。

二の一八 藤原惺窩の秀吉評

◇至人は、己れなし。(莊子)

藤原惺窩、或る時、徳川家康の前で、

「秀吉公は、成程、大膽な人ではありましたが、大心とは申されませぬ。朝鮮を取り入れ、更に、大明國へ攻め入らうとは、大膽至極でござりまする。けれど、信秀を信長の後とは仰がれず、自立して、日本を掌握せられたのは、大心とは申されませぬ。」と評した。

傳へ聞いた、四辻大納言公理は、

「自分も、その論を道理に思ふ。大佛建立は、彼れの猿ごころが離れぬのぢや。」といつたとか。

X X X

「至人は、己れなし。」——至人は、道の至極に體達し得た人である。その見る所天地は、一理である。萬物は、一理の顯現である。従つて、萬物一體である。天地は、一指なり。萬物は、一馬なり。

である。物もなければ、人もない。我れもなければ、彼れもない。彼れは、無我の人である。直ちに、造化と優游して、區々たる五尺の一身には執着しない。

寧ろ、萬物、萬人を我れとして、彼れは、まことに、大我の人である。

人間、この境地に至つて、初めて、善く人を愛し、一切衆生の上に無制限に慈悲を垂れることが出来る。

元龜、天正の群雄中、豊臣秀吉が、獨り、一頭地を抜いてゐたことは、十目の視る所である。彼れは、決して、我執一偏、我慾一偏といふ種類の人ではなかつた。善く愛し、善く恵んだ所を見ても、

露を置き、露と消えぬる、我が身かな。難波の事は、夢の世の中。

の辭世を見ても、幾分、無我の消息を解してゐたかたさへ観察される。それが「幾分」といふに止まつて、至極の場所に到り得なかつたのは、無學の彼れとして、已むを得ぬ。

惺窩の評は、無學の秀吉に對して、酷に過ぎるであらう。

□大事、は力によりて成れるに非ず、不屈不撓に由りて成れるなり。

ジヨンソン

二の一九 寢呆けた八兵衛

◇自ら恃め。(ラ、フォンテーヌ)

獨身者の八兵衛が、ぐつすり、寢込んだ所へ、隣家から、火を出した。

『火事だ！ 火事だ！』と大騒ぎ。

そこへ、友だちが駆けつけて、戸を蹴破つて、内へ入る。その物音に、八兵衛ふと目を覺し、眞つ裸で飛んで出る。友だちが、手にした提灯を、鼻先へ突きつけて、

『隣家が火事だ、見舞に來た。』といふ。八兵衛は大喜び、

『それは、あり難い、一寸、提灯を貸して呉れ。』と、友だちの提灯を借り、手に提けて、庭へ下りたり、裏へ出たり、又た、表へ駈け出したり、裸の儘で、頻りに、騒ぎ廻る。友だちは、合點が行かない、

「八兵衛、何を捜すのだ？」

八兵衛は、抜からぬ顔で、

「いや、行燈が消えてる。燧箱を捜すのよ。はて、目つからない。」

提灯は、道を照らす。人は、各自、良心を有する。王陽明の所謂、良知、良能を有する。理性を有する。亦た、人の道を照らすの具である。人、これに依つて、行手を照らし、浮世の道を辿るのに、萬に一つも、躓つきはない。亦た、一種の提灯か、彼れは、有形の道を照らし、此れは、無形の道を照らす。

斯うした結構な提灯を持ちながら、他人の提灯をあてにするのは痴であらう、愚であらう。他人は、如何にいほうとも、我れは、たゞ、我が良心の命する所に従ふべきである。他人は、如何に振舞はうとも、我れは、たゞ、我が理性の指示する所に従ふべきである。己れの有する所を外にして、他人に依るのは、明るい提灯を手にしたがら、燧箱を捜し廻る、寝呆けた八兵衛の類である。

人は、須らく、獨立の人でなければならぬ。己れの手に依つて、己れの衣食を得るのは、人生獨立の本源であらう。而も、己れの良心、己れの理性に従つて、

己れの道を知り、斷々乎として、所信を實行するのは、獨立の、最も崇高なるものである。但し、所謂、己れの道を知るとは、人の道を知るの意である。

二の二〇 行脚のおきて

◇一竿の風月、南湖に老ゆ。「陸游」

一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。總べて、物の命をとること勿れ。
一、衣類、器財、相應にすべし、過ぎたるはよからず。足らざるは悪し。
一、人の求めなきに、己れが句を出すべからず、望みをそむくも、然るべからず。

一、好んで酒を飲むべからず、饗應により、固辭しがたくも、微醉にして止むべし。

一、他の短を擧げて、己れが長をあらはすこと勿れ、人を譏りて、己れに誇る

は、甚だいやしきことなり。

一、生あるものは、一枝、一草をも取るべからず。山川江澤にも主あり。
一、山川、舊蹟、したしみてたづね入るべし。新たに、私の名をつけることな
かれ。

一、一字の師恩たりとも、忘るゝことなかれ。一句の理をだに解せずして、人
の師となるなかれ。人に教ふるは、已れを成して後の事なり。「松尾芭蕉」

「行脚のおきて」一篇、要は、無我の二字に在る。

無我、故に、能く、造化の呼吸を聞き、自然の生命に觸れることが出来る。山
川草木、名所舊蹟と相同化し、相一致し、兩々、一體を相成して、塵環の外に優
游することが出来る。

趣味も、風情も、その上の事である。風流も、風雅も、その後の事である。有
我、我執の凡俗輩に、風雅の趣きなど、所詮、解るものではない。

二の二 家康水を引かず

◇野邊に生ふる。いさゝ村竹、いさゝかも、人の爲め善き、事ばかりせよ。

「橋技直」

徳川家康は、老後、將軍の職をその子秀忠に譲つて、駿府、即ち、今の静岡
へ隠居した。或る時、城内の池へ、阿部川の水を引かうとして、命をその向きの
役人に下した。役人は、早速、測量に取りかゝつた。そして、水筋に一つの小寺
があつて、邪魔になることを發見した。

後ち、家康は、鷹狩りに出た序で、それを見ると、

「最早、水を引くには及ばぬ。」といひ出した。左右の者は、遺憾に思つて、

「これ程の寺を移すのに、何程の費がかゝりませう。是非！」と勧めた。家康は、
「否々。」と、かぶりを掉つて、